

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
7月13日	聖徳大学	北村 弘明 真鍋 昌子 多田 升美 西澤 清江 齋藤 克人 遠藤 尚子 藤沢 明美	1. 各委員の紹介 2. 委託事業の実績報告 3. 講座の説明 4. 今後について	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの実績報告：平成20年度～平成22年度の報告。 ・今年度の講座名「Can-do型授業活動を実現するための実践研修講座」目的、目標、内容、対象者、応募方法、募集人数、開催期間、開催時間、開催場所の確認。講師とスケジュールの確認。 ・今後の業務計画、実施手順についての検討。 ・送付作業、締切日、選定方法、採択通知、役割分担の確認。
9月20日	松戸市文化ホール	北村 弘明 真鍋 昌子 西澤 清江 齋藤 克人 多田 升美 遠藤 尚子 藤沢 明美	1. 応募者確認と受講者選定の確認 2. 本講座の予定確認と業務担当確認 3. 講師の確認 4. その他	<ul style="list-style-type: none"> ・応募者の確認と受託者の確認。 ・今回も多くの応募者があり、定員予定30名のところ37名に増員することを承認。応募の記述内容、活動年数、地域性などを考慮した人選であることを確認する。 ・受講採択通知と不採択通知の発送の確認。 ・日程、内容、会場の確認。 ・業務担当の確認。 ・講師の確認。事前打ち合わせ、連絡の報告。

10月3日	聖徳大学	北村 弘明 真鍋 昌子 西澤 清江 齋藤 克人 多田 升美 遠藤 尚子 藤沢 明美	1. 受講者確認 2. 第1回目を終えた感想 3. 今後についての確認 4. その他	<ul style="list-style-type: none"> ・受講者が予定の37名であったことの報告と確認。 ・第1回目を終えての現状と問題点を検討。 (前回の参加者も多く、熱意とこの講座に対する期待感を感じた。) ・毎回のレポート(感想)提出で、質問などがあった場合は早めに対応することを確認。 ・担当、役割分担の確認。 ・担当が都合の悪いときは、他のスタッフが代行することを確認。 ・講師および講師補助者との連絡徹底について確認。
11月9日	聖徳大学	北村 弘明 真鍋 昌子 西澤 清江 齋藤 克人 多田 升美 遠藤 尚子 藤沢 明美	1. 現状報告と確認(出席者の様子) 2. グループワークについて 3. その他	<ul style="list-style-type: none"> ・欠席者が少なく出席率が良いことの報告。 ・レポート(感想)も、毎回提出されていることの報告。 ・受講者の熱心な様子や、様々な地域からの参加者であるが、顔なじみも多く親交を深める姿などの報告。 ・グループワークの報告。(地域、年齢を考慮した7つのグループ) ・グループワークの際に講師との連絡を密にすることを確認。 ・今後の予定について確認。 ・修了書授与該当者について確認
12月14日	聖徳大学	北村 弘明 真鍋 昌子 西澤 清江	1. 経過確認 2. 最終日に向けて(出席者数)	<ul style="list-style-type: none"> ・全日程の報告と確認(レポートのまとめ、講座記録、写真、講師との連絡、会場設営

		齋藤 克人 多田 升美 遠藤 尚子 藤沢 明美	3. まとめ作業の確認 4. その他	など) ・最終日の確認。 ・出席日数の確認。(修了書授与のため) ・最終日に欠席予定の人の対応を確認。 ・最終日はアンケートを実施するため、その内容確認。 ・報告書作成にあたり記録などの確認。
1月20日	聖徳大学	北村 弘明 真鍋 昌子 西澤 清江 齋藤 克人 多田 升美 遠藤 尚子 藤沢 明美	1. 全体の感想、課題 2. 今後の作業確認 (報告書作成に向けて) 3. その他	・講座全体の感想と課題。 (受講者の様子、グループワーク、出席状況、講師、回数、内容、時間、会場、連携、各担当作業、まとめなどの報告、感想、課題) ・報告書作成のための具体的資料整理、意見、感想のとりまとめの確認。 ・写真の選択 ・本講座における経費の確認。 ・今後に生かせる成果と、改良して臨まねばならない点について確認。

【写真】(会議風景)



3 講座の内容について

- (1) 講座名 Can-do 型授業活動を実現するための実践研修講座
- (2) 目標
- ① 外国人の生活行動から離れた形式的文法説明ではなく、ボランティア日本語教室の一つの目標とすべき“サバイバル日本語”に対する十分な理解とその表現例が想定出来るようになること。
 - ② 外国人のニーズとその行動目標を外国人の目線から把握し、本当の生活力に繋がる日本語会話能力の育成法と具体的授業活動のあり方を思考出来るようになること。
- (3) 受講者の総数 37 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)
(出身・国籍別内訳 日本国 37人)
- (4) 開催時間数(回数) 36 時間 (12 回)
講義 18 時間 (6 回) 実習 18 時間 (6 回)
- (5) 参加対象者の要件
地域でのボランティア日本語教育に2年以上従事している方。
また、これまで日本語指導をしてきた経験をふまえ、外国人の生活行動を支えるCan-do重視の日本語指導法に関心のある方。
- (6) 受講者の募集方法
聖徳大学広報／東葛地域の各市国際交流協会、教育委員会、日本語教室などに案内書郵送(HPによる募集を含む)。

↓ 下は、配布したチラシ。

平成23年度 文化庁日本語教育委託事業
聖徳大学言語文化研究所主催

Can-do型授業活動を実現するための実践研修講座

平成 23 年
10月1日(土) ~ 12月17日(土)
(全 12 回)

聖徳大学 10号館
松戸駅東口徒歩1分

【講座内容】 講座の半分以上を「実習・参加型」の形態として、単なる“座学”ではなく、具体的な教室活動として教授法や指導手順を実践的に学びます。これまで多くおこなわれてきた「文型の意味を解説するための文例、またはその授業活動」をどのように捉え直せば実践的な日常会話文例・実践的指導法となるかを研修します。

【募集人数】 35名(申し込み多数の場合には、書類選考をおこなうこともあります)。

【応募資格】 地域でのボランティア日本語教育に2年以上従事している方。また、これまで日本語指導をしてきた経験を踏まえ、外国人の生活行動を支えるCan-do重視の日本語指導法に関心のある方。

【参加費】 無料(初回に 配付物印刷費等、実費で3,000円のみお支払い下さい)

【応募方法】 封筒に別紙の申込用紙(必要事項記入)と返信用封筒(※9月20日(火)までに、受講の可否を、折り返し通知いたします。80円切手を添付し、受取人住所氏名を明記のこと)を入れ、下記宛にお申し込みください。

申込書はこちらから <http://www.seitoku.ac.jp/kenkyuiyo/gengo/index.html>
(宛先) 〒271-8555
千葉県松戸市岩瀬 550 聖徳大学知財戦略課 日本語教育研修講座係
(×切) 9月9日(金) 当日必着
(お問い合わせ) 聖徳大学 Tel. 047(365) 1111(大代) 知財戦略課 宛
メールアドレス chizai@seitoku.ac.jp

【担当講師】 北村 弘明(聖徳大学言語文化研究所教授)
米勢 治子(元浜松学院大学教授/東海日本語ネットワーク副代表)
福田 浩子(茨城大学准教授)
吉田 聖子(東京外国語大学多言語文化教育研究センターフェロー講師)
金子 広幸(日本大学講師)

主催 聖徳大学言語文化研究所

(7) 会場

ア 講義 聖徳大学 10 号館(聖徳大学生涯学習社会貢献センター)

イ 実習 同上

(8) 使用した教材・リソース

講師作成プリント

『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(朝日出版社)

『みんなの日本語 初級 I・II』(スリーエー・ネットワーク)

「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について(案)」(文化庁)

(9) 講座内容

日時	講座名/学習内容	講師	受講者数
10/1 13:30~16:30	(オリエンテーション) Can-do 型授業活動という概念	聖徳大学教授 北村 弘明	35 名
10/8 13:30~16:30	ボランティア日本語教室における日本語会話の考え方	聖徳大学教授 北村 弘明	34 名
10/15 13:30~16:30	シャドウイングと日本語指導 /トレーニングの実践法	日本大学講師 金子 広幸	35 名
10/18 14:00~17:00	地域日本語教育における優先 課題とその問題意識	東京外国語大学多文化教育研究センターフェロー講師 吉田 聖子	29 名
10/25 14:00~17:00	ボランティア日本語教室での 効果的授業活動例について	東京外国語大学多文化教育研究センターフェロー講師 吉田 聖子	26 名
10/29 13:30~16:30	教室活動の授業デザイン例と その実践法	聖徳大学教授 北村 弘明	31 名
11/12 13:30~16:30	地域日本語教室で必要とされる コミュニケーション能力の 開発	元浜松学院教授 東海日本語ネットワーク副代表 米勢 治子	35 名
11/19 13:30~16:30	文型中心型指導から Can-do 型 実践文例へ	聖徳大学教授 北村 弘明	27 名

11/26 13:30~16:30	場面シラバスと会話の作例方法——行動の動機と欲求の視点	聖徳大学教授 北村 弘明	32名
12/3 13:30~16:30	到達目標と Can-do Statements でプログラムをデザインする	茨城大学准教授 福田 浩子	32名
12/10 13:30~16:30	自律的学習のあり方—Back to Back/モチベーションの支援	茨城大学准教授 福田 浩子	30名
12/17 13:30~16:30	(総括) これからの地域日本語教室のあり方と可能性	聖徳大学教授 北村 弘明	33名

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

a アンケートの体裁



平成23年度 文化庁日本語教育委託事業

聖徳大学言語文化研究所

Can-do 型授業活動を実現するための実践研修講座

全講座を終わってのアンケート

※該当個所を○で囲んでください。また理由等もお書きください。

1. お住まいは？
(松戸市・柏市・我孫子市・船橋市・鎌ヶ谷市・流山市・野田市・千葉市・その他)
2. この講座を何でお知りになりましたか？
(自治体広報・ポスター・チラシ・インターネット・知人から・その他)
3. ご年齢は？
(～20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代～)
4. 現在、何らかの日本語教育活動に参加していますか？
(している・していない)

5. 本講座の全体の印象

イ 大変満足

ロ 満足

ハ 普通

ニ やや不満

ホ 不満 (理由 : _____)

6. 講義内容

イ 大変わかりやすかった

ロ わかりやすかった

ハ ふつう

ニ 少しわかりにくかった

ホ わかりにくかった

(理由 : _____)

7. 講座科目

イ どの科目も興味を持てた

ロ だいたいの科目に興味を持てた

ハ 半分くらいの科目に興味を持てた

ニ 少しだけ興味を持てた

ホ ほとんど興味を持てなかった

(理由 : _____)

8. 教室の状態・設備

イ 大変満足

ロ 満足

ハ 普通

ニ やや不満

ホ 不満

(理由 : _____)

9. 授業の時間帯

イ 大変満足

ロ 満足

ハ 普通

ニ やや不満

ホ 不満

(理由 : _____)

10. 今後の日本語教育活動への有益性

- イ 今後、大変役にたつと思う
- ロ 今後、役にたつと思う
- ハ 普通
- ニ 今後、あまり役にたつと思わない
- ホ 今後、ほとんど役たつと思わない

(理由:)

11. グループワークに関して (参加・不参加)

- イ 大変満足
- ロ 満足
- ハ 普通
- ニ やや不満
- ホ 不満

(理由:)

12. 特にこの講座で印象深かったこと、学んでよかったと思うこと (自由にお書き下さい)

- ・
- ・
- ・

13. この講座を受講した成果をどんなことに役立てたいと思いますか

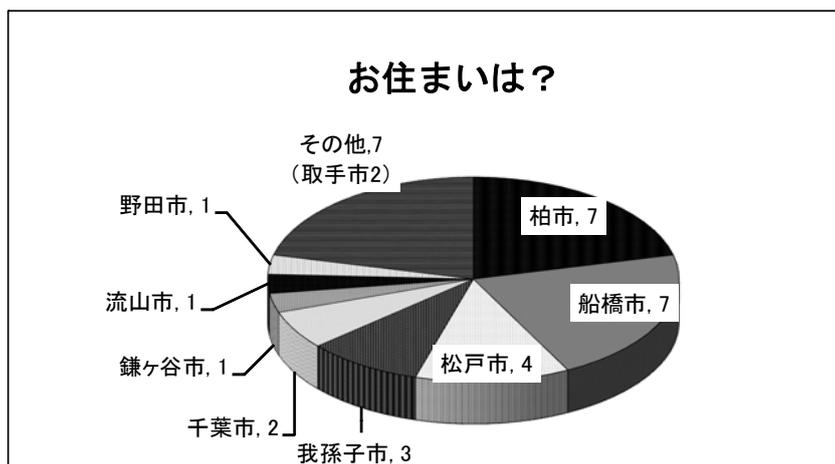
- ・
- ・
- ・

14. 今後、開講を希望する講座がありましたらお書きください

b アンケートの結果・集計

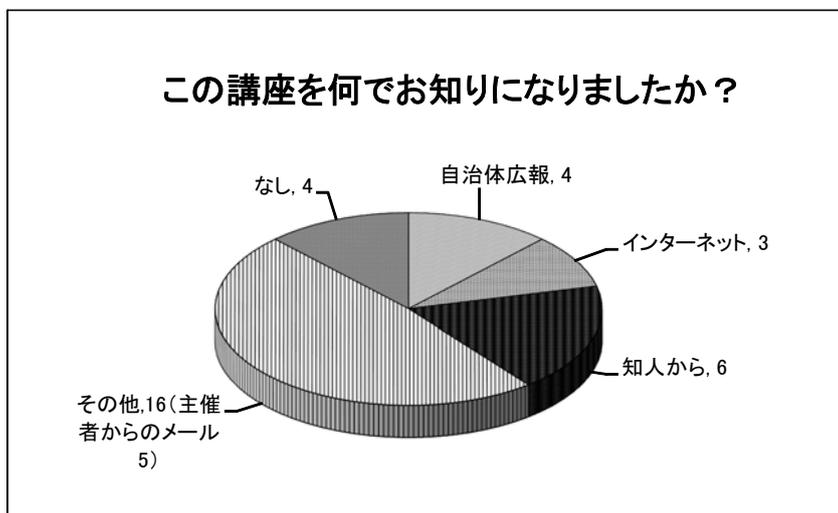
1 お住まいは？

柏市	船橋市	松戸市	我孫子市	千葉市	鎌ヶ谷市	流山市	野田市	その他
7	7	4	3	2	1	1	1	7



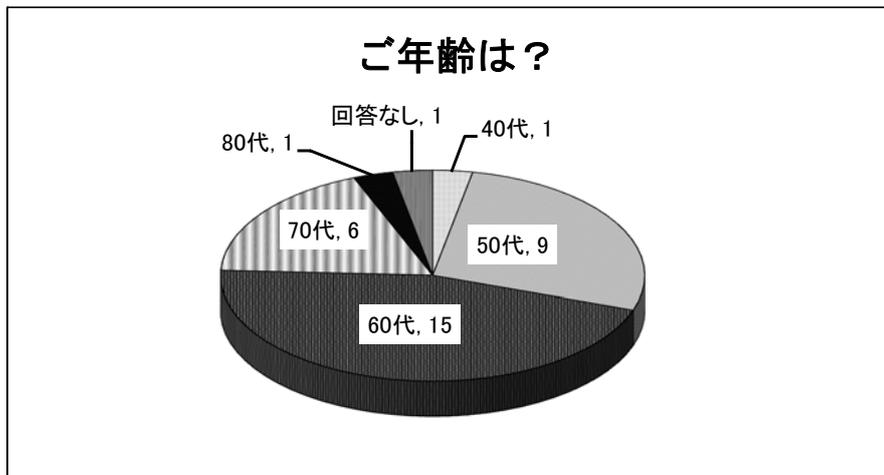
2 この講座を何でお知りになりましたか？

自治体広報	インターネット	知人から	その他	なし
4	3	6	16(主催者からのメール5)	4



3 ご年齢は？

40代	50代	60代	70代	80代	回答なし
1	9	15	6	1	1



4 現在、何らかの日本語教育活動に参加していますか？

参加している	参加していない
33	0

5 本講座の全体の印象

大変満足	満足	普通	やや不満	不満
11	18	3	1	0

6 講座内容

大変わかりやすかった	わかりやすかった	ふつう	少しわかりにくかった	わかりにくかった
3	22	5	3	0

7 講座科目

どの科目も興味を持てた	だいたいどの科目に興味を持てた	半分くらいの科目に興味を持てた	少しだけ興味を持てた	ほとんど興味を持てなかった
5	26	2	0	0

8 教室の状態・設備

大変満足	満足	普通	やや不満	不満
15	16	0	2	0

※ やや不満の理由：コートかけがない・女子トイレが少ない

9 授業の時間帯

大変満足	満足	普通	やや不満	不満
8	19	6	0	0

10 今後の日本語教育活動への有益性

大変役に たつと思う	役に立つと 思う	普通	あまり役に たつと思わ ない	ほとんど役 にたつと思 わない
17	16	0	0	0

11 グループワークに参加して

参加	不参加	回答なし
32	0	1

大変満足	満足	普通	やや不満	不満
6	20	5	0	1

※ 不満の理由:参加後のフィードバックをもっと欲しかった。

12 特にこの講座で印象深かったこと、学んでよかったと思うこと

- ・他の日本語教室の人達との交流・情報交換ができたこと。
- ・日本語でできることの大切さを学べた。
- ・今までの教え方・ボランティアのあり方などについて振り返ることができた。
- ・Can-do 型の意味と使い方→日本語を使って何かをできるようにさせる。教師はそのための手助けをする。
- ・評価システム・CEFR について理解できたこと。
- ・Can-do 型授業の実際がわかり、イメージできるようになった。
- ・演習は、どれもいろいろ考えさせられて新鮮だった。
- ・Can-do ということの意味や意義を、先生方それぞれのアプローチで聞くことができおもしろかった。
- ・Can-do 型という言葉も内容も初めて聞き新鮮だった。
- ・今まで実践してきたことと重ね合わせて、生かしていきたい。
- ・先生方が皆熱心で感激した（他の参加者の方々も）。
- ・先生方の Can-do 型の模擬授業はわかりやすく、熱のこもったお話が聞けたので非常に役に立つと思う。
- ・日本語指導者が自らの学習能力を高め、学習者主体の支援ができるようにならなければ

ばならないことを再認識した。

- Can-do 型について認識が深まったこと。
- Can-do 型授業というものがようやく理解できたこと。
- いろいろな講師の方に教えていただいたこと（それぞれ特徴があっっておもしろかった）。
- CEFR について学ぶ機会を得たことで、国際語としての日本語を教える方向に向かっていくことがわかった。
- 認識だけでなく演習を見たり、体験したりしてよかったと思う。
- この講座が Can-do 型授業活動を実現するための実践研修講座の名のとおり、日頃の授業をする上で何を目的とすべきか、どんな授業を行ったらよいかということがつかめた。
- 10 月 18 日の授業。A 地点から B 地点に 1 人で移動する、この目的に必要な文型をグループ別・個人別に書いて文型集を自作したこと。
- 「電車を利用する」演習はとても勉強になった。
- Can-do 型実践文例。逆の立場（直説教授法で学習する側）の立場になると、母国語でない言葉の難しさを実感した。
- この講座では、先生の熱意がとても伝わった。
- 言葉による様々な面を学ばせてもらい、言葉のもつ力等について気づかせてもらった。
- 自分の現状を知ることにより、できていない点があった。
- 日本語教室の役割は、学習者の方向づけ、自律学習の促し方にある。
- 学習者の意欲付の重要性。
- 地域ボランティア活動が抱えている問題をいかにボランティア間で共有化するかが重要。
- 評価の重要性がわかった。
- コースデザイン、自律学習の重要性についてはよくわかったが、そのスピードと内容の深さについていけず、少し自信をなくした。ただ、このことをボランティアのレベルに下ろして、少しずつ前進していくしかないと感じた。
- 実習トレーニングが多くて緊張もし、自分の失敗もさらけだしたが、具体的なので授業に役立てることができそうだ。
- 先生が言われたボランティアの役割。ボランティアは学習者の促進者であり、目標はボランティアがいなくなる時、という言葉。
- 自分が上手に教えていると思うな、一生懸命やっている人ほど「空回り」していることが多いので、自己評価が必要。
- 日本語を教養として教えるのではない、あくまでも使って役に立つ日本語を教えるのだ。
- グループ全体として捉えると、急に教え方を変えることはできない。皆で問題を見つげだし、共有し解決するという方向に徐々に変えていく。
- 自分の現状の 2 つ 3 つ上のレベルの内容のことを教えていただくのが一番具体的で参考になるとは思うのだが、あまり深く考えずにボランティアをしていたことに気づかされた。

- ・教え方ばかりに気を取られがちだったが、意識改革も必要だと思った。
- ・12月10日の講座で、伝えることの難しさを学ぶことができてよかった。
- ・外国人が日本語を全くわからずに、初めて学ぶ時の気持ちが少しわかった。
- ・自分が語学を学んだのも、それを通して外国の人とコミュニケーションしたり、外国で暮らすサバイバルのためであったりしたことを思い起こさせてくれた。この講座で原点に戻れたような気がする。
- ・Can-do型授業の考え方。
- ・常に、教えたことで学習者にどんな変化を起こすことができるのか、日本語で何かができるというのが大事。
- ・Can-doの素晴らしさと目的(日本語を教える目的をはっきりさせること)を再認識した。
- ・Can-doの考え方を地域のボランティアの中に育てるためには、地道な努力が必要であるとわかった。
- ・コミュニカティブアプローチとオーディオリンガルの両方のメソッドを併せ持つ授業を展開することが重要であると思った。
- ・各市町村で教え方、教室のあり方が違うこと。
- ・自分自身の教え方の足りない所に気づけた。
- ・「実生活に即した日本語を教えよ」ということが大切。

13 この講座を受講した成果をどんなことに役立てたいと思いますか

- ・できることを一つでもすぐに、授業で活用したい。
- ・毎回の授業の中でCan-doを意識して教科書と結びつけていきたいと思う。
- ・学習者に役立つようなCan-doを取り入れた授業をしたいと思う。
- ・自分が教える時に、取り入れられることは取り入れて実践していきたい。
- ・現在の自分自身のやり方を見直すひとつの方法として考えてみたい。
- ・にほんご学級での活用や、市内小学校での日本語指導に活用したい。
- ・ボランティア間で話し合う場をもちたい。
- ・今までもうちの教室では、「今日習ったことの一つでもいいからすぐ使えるようになって帰ろうね」と子どもたちに言っているが、なかなか思うようにはならない。
- ・これからは、教室の中でCan-do型の授業を心がけたい。
- ・ボランティア同士の自己評価システムを考えていきたい。
- ・全体的なCan-do型の概要が理解できた。
- ・所属するグループのメンバーに少しずつ浸透させていきたいと思う(共通認識として)。
- ・教室活動において実践してみたい。
- ・新しく日本語教室を立ち上げたい。
- ・生活に役立つ授業、何かができるようになったと思ってもらえる授業を考えていきたい。

- ・現在の教育の現状を工夫したい。
- ・今後のボランティア活動に反映したいと思う。
- ・自分でまとめなおして、日々の授業に役立てたい。
- ・今後の授業の中で役立てていきたいと思う。
- ・現在実行中のボランティアをより効果的にしたい。
- ・Can-do を自分だけのボランティア活動に活かすだけでなく、身近な所から徐々に広めていきたい。
- ・今回受講しながら、現在のボランティア活動に取り入れている。文型でなく例文が本当に適切か考えるようになった。今後どんな例文がよいのか常に考えて、まとめられたらよいと思っている。
- ・学習者の求めている日本語をもう一度考え直して促進者になりたい。
- ・第一には日本語の授業であり、一緒に教えている仲間と話し合い、自分達の現状の問題点を少しでも共通認識できるように、役立てたいと思う。
- ・行き詰まっていたことがあり、Can-do 型授業を楽しく取り入れたいと思う。
- ・地域の日本語ボランティア会の先生方に学んだことを折りにふれて伝えていきたい。
- ・講座に参加できなかった指導仲間にも、折りに触れて学習した内容を伝えていきたい。
- ・地域のボランティア活動に生かしていきたい。
- ・学習者に役立つ日本語を教えていくこと、およびコミュニケーション的な方法で授業をするヒントにしたいと思う。
- ・会話重視の授業に生かせたらと思う。
- ・まず Can-do の意識をもった授業をすることを心がけ、必要に応じたよりわかりやすい授業をしたい。
- ・機会があれば伝達研修をしたい。

14 今後、開講を希望する講座がありましたらお書きください

- ・日本語の欠点、日本人のことばの欠点等。
- ・具体的な Can-do 型カリキュラムを作成できる講座・ワークショップなど。
- ・Can-do 方式を実践しているグループの実例を参考にしたい。
- ・実践講座、ただし個人の実習ではなく、今回のように複数で助けあって（グループ）。
- ・時々勉強させていただければありがたい。回数は減らしてもかまわないので。
- ・ボランティア活動を前提とした授業展開の実例実習。
- ・さらに具体的な Can-do 型を実践できる内容であればよいと思う。
- ・Can-do 授業・演習をもっと期待する。
- ・もっと実践編を期待している。
- ・ぜひまた、このような研修をお願いします。
- ・Can-do 型教材をたくさん使ったもの。

- ・同じような内容の講座でもよいから、引き続き日本語教育の講座を何回も開いていただきたい。
- ・この続きをさらにお願ひしたい。
- ・先生に Can-do の模擬をやっていただいたが、訴求力も高く勉強になった。できれば実践できるための模擬を数多くやってほしい。
- ・海外で評判のよい日本語教育の現状について学ぶ機会があればよいと思う。

毎回の授業に提出してもらったレポート体裁



平成 23 年度 文化庁日本語教育委託事業

Can-do 型授業活動を 実現するための実践研修講座

(聖徳大学言語文化研究所主催)

レポート用紙

平成 23 年 ____ 月 ____ 日

氏名 _____

授業内容 _____

当講師名 _____ 先生

【授業中、特に印象に残った点】(出来るだけ箇条書きにしてください)

・

・

・

・

【質問・要望事項】（出来るだけ箇条書きにしてください）

- ・
 - ・
-

レポートの結果

【特に印象に残った点】の項目に記されたもの(各授業別)

第1回「Can-do 型授業活動という概念」で特に印象に残ったこと

- ・文化庁が、外国人の生活実態を実際に調査して例文項目を作ったので、実践的な会話が提供できるという点。文化庁も考えているという感想をもった。
- ・ボランティアの精神は、困っている人に自分のできる範囲できちっと手当を（友愛の精神で）することであり、独善的におちいってはいけない、とあらためて自分へのいましめとした。
- ・出来る≠言える ということの違い。
本当にコミュニケーションが実現されるまでを教えるのが、真の目的だとしっかり心にとめた。
- ・教師が真の目的を忘れないよう、Can-do 型の授業を展開できるようにする。
- ・自分のできる範囲できちっと手当とする。
- ・表情としぐさまで教える。感情を込めて表現できるように教える。
- ・コミュニケーションができるところまで教える。
- ・使い道のあることば（会話）にして教える。
- ・「すみません」や「ありがとうございます」などを付け加えて教える。
- ・「言える」と「出来る」はイコールではない。本当にコミュニケーションが実現されて、はじめて「出来る」ということになる。
- ・日本語ボランティアは日本語を教えることが目的ではなく、日本語でコミュニケーションが実現できるようになることが目的である。
- ・ボランティアは自分本位であってはならない。相手にとって本当に手助けになるかが重要である。
- ・地域の日本語指導は、Can-do 型指導が必要であることの具体的な理由がよく理解できた。
- ・「ツボさえ押さえれば（誰でも）教えられる日本語指導テキストを企画している」ということを聞いて、期待している。
- ・自己満足のボランティアにならないためには確認が必要である。

- ・構文教科書を使った Can-do 型授業へのアレンジの実践が印象的であった。
- ・今まで教えてきた授業が、文法中心ではなく、生活に必要な日本語を教えてきたのか。
- ・ルールを知らなければ話せないと、今まで思い込んでいなかったか。
- ・表面だけの構文指導だけでなく、「機能」を教えなくてはならない。
- ・ボランティアは一方通行ではダメ。自己満足になっていないか。
- ・本当に困っている人に自分のもっていることを、できる範囲できちんと手当することが大事である。
- ・「出来る」と「言える」は違う。ことばを使って何かが実現できなければいけない。文法の表面だけでなく、しぐさや感情を込めることによりコミュニケーションが豊かになる。
- ・構文教科書の使い方。「Can-do」になるヒントをもらえた。
- ・「話す」「聞く」だけでなく「読む」「書く」ことの必要性の再認識。
- ・「ボランティア」ということについての考え方。
- ・構文教科書を併用しての指導例が実践的であった。
- ・学習者が生活していく上で、初めに学習者が必要としていることから教えていくこと。
- ・日本語ボランティアは自分がやりたくてやっているという意識でなく、学習者の役に立っているか確認することが大切。
- ・Can-do とは、言えるだけではだめで、コミュニケーションができる力まで指導すること。
- ・教科書どおりの形式的な練習が実際に使うものかどうかを考え、実践的なものに変えていくこと。
- ・ボランティアという概念、考え方についての説明。
- ・実際の授業は、役に立つ日本語の使い方を教えることだという発想をもつ。
- ・授業の展開は構文を教えるだけではダメ。
- ・「聞く」「話す」を偏重していたが、「読む」「書く」も無視できない事柄であることを教えてもらった。自分の住所は漢字で書けるように等は見落としていた。
- ・サバイバル日本語のよい教科書のみならず、よい指導ということもむずかしいが大事。
- ・ボランティアの役割の限界について。
- ・実現され、気持ちを通じ、コミュニケーションが成立することが大事だということ。
- ・構文用の教科書を使わざるを得ないとしても、本当に必要な言い方を取り出して、加工して教えることが大切。「～時からです」「～時までです」の使う場面を考えることが大切だということを思い知らされた。
- ・文法は会話の向上には無益である。
- ・ボランティア＝友愛の意味：一方的なものではないこと。
- ・単に「正しく言える」のではなく「コミュニケーションが出来る」ことが「日本語が出来る」ということである。
- ・大学の日本語教育は文法など知識偏重で、実践的な生活のためでなく卒論のためである。
- ・文型練習用の教科書の例文を日常使えるようにモディファイするよう考える。(Can-do

化)あるいは口頭練習用として割り切る。

- ・生活場面から切り離された抽象的な言語体系を教えるはいけない。
- ・ルール（日本語）を知らなければ話せないではない。反射的に話せることが大切。ルールは学者が分析したアイデアである。
- ・「ボランティア」とは、本当に困っている人に自分のできる範囲できちんと教えることである。
- ・「言える」は文法的に正しく言う。「出来る」はコミュニケーションができて、人間関係ができることである。
- ・「10分」の読み方は、今日では「じゅっぶん」「じっぶん」どちらでもよい。
- ・ことばだけが言えるようになっても、本当に使えるようになったことにはならない。
- ・「話せます」「聞けます」だけではわかったことにはならず、人間関係を構築することができない。
- ・テストの時に良い点が取れることと、実際に使いこなせることは別である。
- ・日本語ボランティアの最終目的は、日本語を教えることではなく、この表現を使って、いかに上手に人間関係を構築できるかを教えることである。
- ・「ボランティア」とは本当に困っている人に対して、自分のできる範囲で手当することである。
- ・「外国人を最初から犯罪者にしない」——自分たちの会を立ちあげて助成金申請の時、説得に使ったことばの一つだった。
- ・機能の中には、疑問文の形をとっていながら、依頼のことばになることもある。
- ・コミュニケーションが実現されなければいけない。言えても、コミュニケーションができなければ言えたことにはならない。
- ・「生活上の行為の大枠」というプリントは、とても役に立つと思った。（病院や移動・買い物はなんとなく想像できたが…）
- ・授業での Can-do の工夫の仕方。具体的で参考になった。
- ・生活上の行為内の「情報を収集、発信する」の説明で、外国人の犯罪はことばが話せないことが起因となっている。
- ・ボランティアは一方通行ではない。外国人が本当に助かっていることが確認できる双方向である。
- ・「[ボランティアは易しいようで難しい] 哲学的にも」ということばはさらに奥が深く難しいと思った。
- ・「学習項目の要素」において先生のことばを聞き、よく整理されていることを再認識した。
- ・自分の教え方が「口ならし」的で、実践的でない（日常会話で使えない）ことに気づかされた。今後は使える会話として加工し、割り切って取り組んでいこうと思う。
- ・日本語教育が外国人の犯罪の抑止力になり得るということを知り、教育の必要性を感じた。

- ・文法の位置づけとして、日本人同士でもルールを考えながら会話をしている人はいない。条件反射でことばがでることが大切であるという点を聞き、反復練習の大切さを感じた。
- ・学習項目の機能の中で、文型が疑問文であっても、依頼や勧誘などの機能がある点が興味深かった。
- ・「コミュニケーションが出来る」ということは「言える」という事実ではなく、ジェスチャーやイントネーションなども含み、相手に受け入れられるという面も含まれていることがわかった。
- ・一人よがりのボランティアにならないために、効果の確認と自己研鑽が必要である。
- ・Can-do の日本語教育は表情や動作、声のトーンなども大切である。
- ・形式的な構文になっている文型を加工して Can-do に導く。
- ・外国人の言語生活にあてはめて例文をつくる。
- ・コミュニケーションの完成とは、できることは体得して使えること。それによって人間関係が始まる。
- ・コミュニケーションができるとは、本当に使えるということ、これが Can-do の基本である。
- ・ボランティアの精神とは、一方通行ではだめ、のみならず確認作業が必要である。
- ・外国人といっても、地域の日本語教室の学習者のみ接点が多いので、日本語がわからない定住外国人の問題について考えたことがなかった。
- ・Can-do においてしぐさや表情、声のトーン等は人間関係・コミュニケーションを実現させるために必要。ただ、場面設定だけではだめだということ。
- ・みんなの日本語等文型シラバスを使っても Can-do を考える。
- ・みんなの日本語を Can-do 型授業に変える方向/方法。
- ・実際に指導する時には、教科書の構文のままではなく、必要で役立つ例文を選んだり加工したりして教える。
- ・常にサバイバル日本語の観点を忘れない。
- ・教える時には、言えればよいと考えがちだった。
- ・練習 B の口ならしのトレーニングでは、足りなくて「書いて覚える…」のテキストでも練習していたが、あまり使わない表現は工夫して練習しなければならないことに気づかされた。
- ・新出語を絵カードで示して指導しているが、多くの場合、絵を提示すると学習者の手助けになることを再認識した。
- ・日本語教室での学習内容の目的をはっきりさせる。「Can-do」型の指導にも必要である。
- ・Can-do とはただ「言える」のではなく、人と人との交流、人間関係を築くこと。
- ・日本語能力検定試験の N5～N1 に関すること (N1 は以前の 1 級よりもむずかしい)。Can-do 式の評価の仕方など。
- ・構文の教科書で教えるときにも、Can-do を忘れずに！実践的な内容を考える。

- ・ 文型・構文ありきではなく、生活上の行為から内容を作ることが必要である。
- ・ 文法やルールを知らなくても話せる。
- ・ 教科書を1課から順に教えると、「～てください」など本当に必要な文が後回しになる。
- ・ 教えることが本当に役に立っているか、助けになっているか確認する。
- ・ 練習Bは、外国人の生活に使うものに加工して感情表現と共に教える。
- ・ 日本語ボランティアは、誰にでもできるわけではない。
- ・ 日本語ボランティアは、本当に人の役に立っているのか確認すべきである。
- ・ 日本語学習者が日本で円滑な生活を過ごせるようにするのが、日本語ボランティアの最終目的である。
- ・ この教科書を使うかぎり、練習Bはトレーニングと割り切る。
- ・ 「生活者としての外国人」が社会の一員として生活を送ることができるようにする。「本当にそうなのだろうか？」を考え指導する。
- ・ 標準的なカリキュラムにおける学習内容の機能。
- ・ 例文について……生活に根差したものにすること。
- ・ ボランティアの精神。やりたいからやっているのではなく、双方から確認の必要がある。
- ・ 形式的な練習よりも、街でもっとよい表現がないか加工して教えることが大事である。
- ・ 外国人を生活者として迎えるということは、健康かつ安全、自立した生活、社会の一員、文化的生活を送れるようにすることである。
- ・ 構文が先にありきでなく、生活行動があつて、それに必要なものから教える。
- ・ 機能とは本当に伝えたいことであり、これが大切。
- ・ 四技能のうち、「読む、書く」も初級から基本的なものは教えていく。
- ・ Can-do は文法にあった日本語が言えることではなく、日本語をどのように使うかで、相手に受け入れられコミュニケーションができることになる。
- ・ 何のために日本語を教えるのか、もう一度考えること。
- ・ 実際の教室授業では、
 - ① みんなの日本語の練習Bのように形式的なパターン練習だけでなく、Can-do型練習へのアレンジをすることが大切。
 - ② 課別に設定された文型に制約される必要はない。基本的に重要な表現（例：～てください）は、初期の段階で教えてもよい。
- ・ 地域社会で軋轢を生じているという話を聞き、地域の団地の商店街で、コンビニの前に座り込んでいる外国人の子どもたちが学校に行かず、ことばがわからないまま、どうするのかと心配になったことを思い出した。
- ・ 日本事情や心情まで教えて、Can-doだということ。コミュニケーションができて、初めて人間関係が構築できるということ。
- ・ テキストを使って、文型通りに日本語を積み重ねた気がする。説明が多くなってしまうことも反省。

- ・日本語ボランティアは、相当の専門性が必要であるということに同感。
- ・実践力の不足を自他（活動グループ内）共に実感している。
- ・「出来る」と「言える」は同じではない→どのように教えれば実現可能か。努力あるのみ。
- ・アイコンタクトは、文化によって違う意味をもつ。
- ・Can-do の具体的意味がわかってきた。
- ・外国人の文化習慣（目を見続ける等）について、自分の無知に気づいた。
- ・「すみません」「ごめんなさい」に機能をもたせるやり方が具体的にわかった。
- ・自分がやっているボランティアの成果の客観的評価法を知りたいと思った。
- ・文型を練習にそって、授業を進めながらも日常使う型に加工することが必要。
- ・ドリルは、表情やしぐさも含めて伝える練習が必要である。
- ・「Can-do」という概念が今まで漠然としていたが、自分の中で少し具体的になってきた。
- ・自分がボランティアをしている理由を真剣に考えたことがあまりなかったことに気づいた。
- ・シンプルな表現ほど、実際の場面を設定するのが難しいと感じた。
- ・「Can-do」型とは、生活場面から切り離された抽象的な言語体系を学ぶことではない。
- ・ボランティアをすることの意味は、自分がしたいことではなく、相手が望んでいることができているか、助かっているかを確認すること。
- ・「みんなの日本語」を使って指導する際に、例文を加工して、実際の場面で言う表現を提示すること。
- ・文法（ルール）は学者が分析したアイデアにすぎない。ただ、知っていれば応用がきく。
- ・自分のできる範囲で、困っている人にちょっと手当てするのがボランティア。
- ・ボランティアは日本語を教えることが目的ではない。どう日本語を使えば、人間関係を構築できるかを教えることが目的である。
- ・みんなの日本語を基本に授業するならば、その観点から「全課」にわたって、自分なりの教案をつくる必要性を痛感した。
- ・Can-do は、「ことばだけでなく正しい行動を一致させることが大切」である。それがコミュニケーションである。
- ・構文用のテキストを使いながら、どのようにCan-doの要素をとり入れていくか。→教案作成時の意識のもち方が大切。
- ・Can-do とは何か。「実際に生活する上で必要・効力のある日本語を学ぶ」、今そのような観点が必要であるという考え方から生まれてきたもの。
- ・正しい言い方でただ言える、聞けるということだけを教えるだけはいけない。人と人との交流につながることばが必要である。

第2回「ボランティア日本語教室における日本語会話の考え方」で特に印象に残ったこと

- Can-do 型授業の真の意義が言えるだけにとどまっていたはダメで、めざすのは言ったことによって相手の状態を変えさせ、目的を完遂できること。
- みんなの日本語の文型・例文を使う際、学習者がそう使わざるを得ない状況をしっかり考える。
- 教科書を Can-do の方へ合わせられるような授業をしていく。
- コミュニケーションが目的ではなく、あくまでもプロセスであるということ。
- 日本語教育の問題点の内容をそのままやっている人が多いことを実感している。
- 「れる」「られる」の受身形を使いこなしていない学習者は確かに多いと思っている。
- ボランティア日本語教室は、地域に根ざした具体的な会話を教える必要がある。
- コミュニケーションができ、相手がそれに対応して行動してくれる（機能する）ことができ、初めて Can-do ができたことになる。
- Can-do における do の意味や最終目標の具体的到達レベルについて。
- can と do が別々であること。
- みんなの日本語に対してもつべき「新しい」視点と発想。
- 今までの教え方では、機械的に「言える／話せる」ということにとどまっている。相手が反応して行動してくれなくては Can-do にならない。
- 常に例文を本当に使う場面があるかどうか考えなくてはならない。
- 日本語を通して、セグリゲーションからインテグレーションへ移行させるということ。
- 文法は、自分が発話したことが正しかったかどうか立証する時に必要なものである。
- 多言語主義と複言語主義について。
- 指摘された「日本語教室（指導方法）」の問題点」のほとんどが自分の反省点そのものであったこと。その反省点を今後どのぐらい改善できるかを考えたら、少々頭が痛くなった。
- ボランティアでの日本語は地域に根ざしたもの。一般的に共通することに上乗せして、地域の具体的、現実的なことを考慮して授業すること。
- Can-do の意味は、何かを言うだけではだめ、相手が反応してくれるような使い方をせよ。
- みんなの日本語の提出順にこだわってはいは、Can-do は教えられない。
- 「～へ行きます」は通常の会話ではあまり出てこない。多くの場合、「断る理由」として出現してくるものである。
- 相手の国の言語構造をよく知る必要がある。go と come の例がわかりやすかった。
- 初心者にも機能達成のため、難しいと思える言い方を決まり文句として教えてしまう点。
- 地域に根ざした具体的な会話を教えることがボランティア教室には求められる。
- コミュニケーションと Can-do は異なるということ。
- 「行きます」という動詞は大事だが、そのままの形では特殊なケースで、「行ってください」等の表現がよく使われ、むしろそれを先に教えるべきだということ。文法体系に関

係なく、よく出現するものから教えていくということ。

- ・日本語学校の日本語は想定場面と状況で、主に文型中心である。ボランティアの日本語教室は、「具体性を持つ現実場面」で地理、ゴミ分類や捨て方等地域の場面や状況に即したことを教える。
- ・Can-do とはコミュニケーションプロセスであり、目的ではない。→「相手に影響を与えて相手が応じたか、反応したか。相手がそれに応えて動いたか。」が問題である。→機能(function) : do 何かができる。
- ・日本語学校の会話は、一般性のある場合の想定に基づいて行われる。ボランティア教室は、地域の実情に根ざした具体的な場面で行われなければならない。
- ・コミュニケーションは目的ではなく、プロセスであり、その先の機能をみる。「言える」「話せる」だけで終わらないで、相手が理解してくれて相手の行動に影響を与えることができたかがゴールである。
- ・演習 (Can-do ではない例)、単に「行きます」「来ます」の意味と助詞「へ」「に」が付くことを教えているにすぎない。(例)「これから～に行きます」という「決まり文句」として教えればよい。
- ・コミュニケーションの1つの意味は相手が言いたいことが伝えられることであるが、2つめは相手が何か行動に移すようにさせることである。
- ・「ことば」は状態変化させるものである。
- ・ボランティアの日本語教育では、日本語を通してセグリゲーションからインテグレーションに移行できるように指導しなければならない。
- ・日本在住の外国人が日本人に心を開く玄関口は、日本語の先生である。
- ・「会話」はルールでは解決できないもの。ただし、自分が発したことばを後で検証して言い直す時には(文法は)有効である。
- ・「屈辱」を教えることで「納得」させることはできるが、「武器」にはならない。
- ・Can-do が can だけでなく、しっかり do して実現できなければならない。
- ・「行きます」を教えても、その機能を教えなければ使えない。気がつかなかったが、意外にも「行きます」という例文の使いようがないことに気がついた。
- ・教室で示された3冊の教科書の対比はとても参考になった。
- ・Can-do の実際はかなり難しいと感じた。発想を変えるよう努力したいと思う。
- ・今まではコミュニケーションとして「言える・話せる」止まりであったが、その先、自分の意志が相手に伝わったかどうかの方が大事であり、相手が反応させるまでもっていくのがCan-do である。
- ・CEFR の強みは実践から生み出されており、成果が出てきて評価されている点である。
- ・「～んですが？」の「ん」の役割として、後のことばを省略できる、すぐれものである。
- ・Can-do 型授業活動の理解と具体的な実践方法について、コミュニケーションにとどまらず、「do」できる教え方に少しでも近づきたい。

- ・地域に根ざした言語教育の実践についてさらに努力したい。
- ・地域に根ざした具体的で現実的な会話を教える。
- ・ことばが言えるのではなく、自分の言ったことに対して相手が反応（行動）してくれる、これが Can-do である。
- ・会話の目的……コミュニケーションはプロセスであり、ファンクションとしての発話ができる、初めて can になる。
- ・ボランティアの問題点はボランティアとしての技量の大切さ、長い経験が邪魔をして切り換えができないことである。
- ・みんなの日本語を使用するときも常に学習者の使える場面を考え、導入しなければならない。Can-do に近づけなければならない。
- ・Can-do の意味（コミュニケーションから機能への転換）＝「行動につなげる」という意味。
- ・日本語教育の学習指導方法の問題点のうち、「教師が自らのイメージ」にとらわれていることが弊害である。
- ・Can-do 型学習の例として、「断る」表現を様々に言いわけて実演していただいたこと。
- ・「週 2 時間を有効に使う」「家庭学習の効果的なノウハウも必要」・再認識した。
- ・CEFR についての説明……初めて知ることができた。
- ・会話は、「ことばの運用が成功して、相手の気持ちを動かせることができる Can-do 型」でなければならない。そのためには、現実的なことまで含めて会話をつくる必要がある。
- ・地域に根ざした会話とは一般論ではなく、具体的な現実の場面を想定する。
- ・文型と文法の差異をよく認識する＝ルールでは会話できない。
- ・コミュニケーションは、意思の疎通だけで相手の動作を促すまでにはいかないことに初めて気づいた。
- ・Can-do の本当の意味がわかった気がした。
- ・難しい表現や長文を教えるのではなく、短くても場面や状況が正確に伝わる表現を数多く教えることが大切なのだと感じた。
- ・文型、文法のルールで会話はできない。文法を教えたがる。地域ボランティア日本語教育の問題点。
- ・地域の日本語教室は、ローカル性を共有している点が強みである。
- ・『みんなの日本語』第 5 課「行きます」は、単語の意味を教えるだけになってしまうので、「行ってください」「行きたいです」まで導入で教えるとよい。
- ・(外国人) 相手の言語を知った上で教える。
- ・CEFR は、ヨーロッパで長年実践され、効果のあることが証明された言語学習法で、日本でもこれを採用した。
- ・Can-do とは、コミュニケーションができるだけではダメ (can-say だけは×)。その先にある目的を達成できないといけない。「do」が大事。

- ・「明日どこへ行きますか?」「奈良へ行きます」……ふつうの生活場面では、絶対あり得ない会話。しかし実際には、教室で何の疑問ももたずに、たいていの教師はこのような会話を教えている（まさに、教科書「で」教えずに、教科書「を」教えているのですね）
- ・Can-do は、単に「言える、話せる」から相手が反応してくれる、相手に影響を与えるような会話にすること。
- ・生活者としての外国人が、一般の社会に溶け込めるようにするのが理想的な日本語会話の目標である。
- ・文法はルールとして置いておき、文型が自動的に出てくるのが大事である。
- ・行きたい場所の聞き方「～んですが。」を場面に合わせて運用する（新宿に行きたいんですが。）ことで、本当のCan-do 表現になる。
- ・コミュニケーションは会話の目的ではない、その奥にあるファンクションが大切。
- ・Can-do の do の意味……機械的に言えるだけでなく、相手が自分の思ったように反応してくれた結果まで含めてとらえること。
- ・Can-do のために一般論でなく、ローカル性（地域性）が大切。これがボランティア教室の特性。
- ・生活者としての外国人を受け入れること＝セグレーションからインテグレーションへ。お互いに学び合う、パートナーシップ。
- ・会話（日本語教育）の本当の目的・・・日本語を通してインテグレーションの教育をすること。ことばで can できる。
- ・「私は～～へ行きます」……それがわかって何になる！みんなの日本語を Can-do の発想で出来るだけ教える。
- ・地域の日本語教室では、地域の実現的な場面が活用できる。活用すべきである。
- ・自然な場面で文型を教えること。
- ・日本語の会話を通して地域で暮らす外国人を、セグレーションを乗り越えてインテグレーションのレベルに導くことの重要性。それが必要であること。
- ・ルールがなくても話せる。条件反射的な部分が必要。
- ・今までの提出順を、改めて学習者のニーズに合わせて考え直すことを気づいた。
- ・コミュニケーションは、会話の目的ではなくプロセス。受け手に影響を及ぼすことが目的である。
- ・みんなの日本語の出順にこだわらず、必要性に応じて教えた方が学習者にとって有益である。
- ・地域に根ざした会話が大切だが、地域特有の内容だけ扱うのも間違い。
- ・外国人は何かをしたくて日本に来ている。
- ・「行きます」いつ、どんな時に使うか。「行きます」と言わなければ困る場面。言わないと不自由な場面を考える。
- ・みんなの日本語を使っている、Can-do の発想をもってやる。テキストを使った実例が

わかりやすかった。

- ・コミュニケーションは、「話せる」「言える」が単に相手に伝わるだけではなく、その目的が達成できなくてはならない。
- ・会話の目標は話せるだけでなく、行動できること、相手に意志が伝わることである。アクションが起きることが必要。
- ・地域ボランティア日本語教育の問題点をどう克服すべきか、CEFR はその有用性が実践され、証明されている。
- ・Can-do の授業を実際に行うことは、とても難しいと感じた。
- ・会話で「〇〇までいくらですか」を生活者は使わないことが多い。教えてもよいが、ほとんど (Suica 等の) カードを持っている＝ことばを使わなくていい。
- ・会話の「・・・どうも」だけで終わらせないように一言入れてほしい。
- ・構文の教科書の〇〇課で出ていないのに教えていいのか？の質問はとてもよかった。いかにボランティアがテキストに縛られ過ぎているかの事例。
- ・Can-do を実際の授業でどのように教えるか。ほとんどの人ができないと思う。
- ・生活者としての外国人：「隔離性」から「統合・共生」へ（「同化」ではなく）、共に学ぶ「パートナー」として対等な関係（持ちつ持たれつ）。

第3回「シャドウイングと日本語指導／トレーニングの実践法」で特に印象に残ったこと

- ・学習者の要求が自分には無理かも…と思ってもそこを乗り越えていく。
- ・例に出された、ファストフード店での Can-do が印象深かった！
- ・文法はコミュニケーションを助ける。
- ・現実場面を意識した活動。
- ・大学（学生が多い）と日本語教室（主婦が多い）は違いすぎると感じた。
- ・どんな Can-do が必要なのか、ということ。
- ・学習者に「観察力」「達成感」を与えることが大切。
- ・Can-do にもレベルがあること。
- ・教室外の活動に結びつける。
- ・学習者がどこでどのように日本語を使いたいと思っているのかを把握することが大切。
- ・学習したことを使えるようにするためには、Can-do タスクを考えて授業に盛り込む必要がある。
- ・学習環境・本物らしさ・達成感・学習意欲の促進を考慮する。
- ・学習者の希望に沿ったコース設定ができたこと。
- ・Can-do 型授業の実践例はとてもおもしろかった。到達させたい地点の決め方もわかりやすかった。
- ・学習者がどこでどのように日本語を使いたいと思っているかを把握できているか。
- ・学習者が自分の欲求を解決する最短距離が、Can-do である。

- ・文法は、コミュニケーションを助けるもの。
- ・Can-do にも、難易度によっていろいろなレベルがあること。
- ・学習者の参加している社会を利用しての疑似体験。
- ・これを勉強したら何が達できるか、達成感を味あわせる。
- ・ファストフード店で注文する時の Can-do の具体例がよかった。
- ・講師の中国語学習の体験談。
- ・教室内の活動を教室外の活動に結びつけることの意義。
- ・教科書どおりの教え方では、現実に関わりづらく、遠回りの学習になる。最短距離でのアプローチをすること。学習者にとってすぐ使える必要なものを教えていく。ことばでの表現から、文法を教える。
- ・教室内活動と、学習者が日々直面する教室外の活動を結びつける活動を考えて、授業に入れていくこと。
- ・Can-do とは何か。中国語学習体験を例示した教授法について。
- ・初級者を教える場合、文法も大切だが、あくまでもコミュニケーションを助ける道具である。
- ・サンキューカードの作成事例を教室活動に生かす。
- ・教室内活動をどうしたら教室外の活動に関わりづらくする。
- ・ファストフード店で注文する、という活動から Can-do がどういうものかを実感できたこと。
- ・文法を Can-do の中の現場で教えこんでしまうこと。
- ・自分の英語教育の経験ともあいまって、とてもわかりやすかった。
- ・学習者の希望する自己実現の把握。(入門初級レベルでは困難。)
- ・日本人が使っていることばを観察すること。
- ・現実場面を意識した活動、疑似体験。
- ・ファストフード店で注文する→出来る=Can-do 対応の manual 化=Can-do 化→わからないときは日本人に助けを求める。
- ・9年間勉強しても英語が使えない日本人。→従来のやり方で日本語授業も同じことをやっている→Can-do 化が必要と感じた。
- ・学習者の将来の夢に必要な日本語の知識を要求された時、ボランティアはめげないで、乗り越えてほしい。
- ・ボランティアは何かひとつしたら、必ず自己評価する→「ふりかえり」
- ・文法はその都度入れていく。(例) 現在形で言った時、過去形を数例教える。
- ・学習者が来なくなった時、「達成感」がなかったかも知れないと考える。[Can-do の考え方として]
- ・学習者が日本語を学ぶ最短距離で学習すること
- ・現場ですぐに使える表現を学ぶこと。

- ・文法は、あくまでもコミュニケーションを助ける手段である。
- ・「自分の身に何か利益があった」という達成感がないと、学習の効果は出ないもの。
- ・感激や共感で学習を促進させる。
- ・「覚えておきましょう」より「(実際の場面で)使ってみましょう」の方が、学習者の印象に残るもの。
- ・Can-do の実践がおもしろかった (自分の訓練の仕方を教えていただいたのがよかった)。
- ・Can-do の広げ方に目からウロコ。
- ・サンキューカード、やってみたいと思った。
- ・学習者のニーズをとらえることの大切さをあらためて感じた。
- ・Can-do の具体例をいくつか提示していただき、とても参考になった。
- ・本物らしさ、現実に結びついた授業を心がけるようにしたいと思った。
- ・達成感もてる学習について。
- ・現実場面を意識した活動の推進について。
- ・カタカナの学習方法について。
- ・学習者が達成感を味わうこと、それには、現実場面を意識した活動が必要。
- ・学生の目的希望を達成させる、というむずかしい課題にチャレンジされた先生方の勇氣に感服した。立場の異なる学習者に、どのように応用できるかが私の課題である。
- ・「日本人観察日記」を書いてもらおうと思った。
- ・一つの task を実現 (達成) するための Can-do の作り方。
- ・「観察力」というものが、言語習得に結びつくこと！
- ・学習者の「興味のあること」を把握する。→自己実現につながる？
- ・「テキスト」の文型・文法を「Can-do」へつなげる。
- ・実用場面 Can-do→文法・チェック練習～使える文型。
- ・カタカナ学習も、Can-do を意識して行うといい。
- ・学習者の自己実現を把握し、そのために教師は何ができるか考える。
- ・遠回りしない最短距離の勉強が Can-do である。
- ・タスク練習を解決していく中で、その中に出てくる文型、ことばの中で文法を入れる。
- ・外国人が、日本人を観察してことばを学ぶということに気づかされた。確かに、自分も外国で、その国の人のまねをして話していたことを思い出した。
- ・学習者の自己実現を把握していないので、把握したいと思う。
- ・活動でみなさんと話げできたこと。
- ・面倒だが、「ふりかえり」の活動をする。
- ・英語を9年習っても、「ハンバーガをください」が言えなかった。日本人の英語学習を参考にする。
- ・実際にあった事例を使って、いかに Can-do を達成したか。
- ・わからないことを日本人に聞く時の聞き方、メールや手紙の書き方の指導をどうするか。

- ・〈ファストフード店〉で注文する。句型、ことば、サバイバル、に分けて使われていることばを上げていくうちに、そうか…これが Can-do かと…思った。
- ・学習者達は文法学者になるのではない。
- ・学習に大切なのは達成感である。達成感とは自分の身にプラスになるものがある。
- ・事例を聞いて、「学習者がどこでどう日本語を使いたいと思っているか」ということに意識をもちたい。
- ・生徒の自己実現を把握しているか。どこでどのように日本語を使いたいと思っているか。
- ・学習者たちは、現実結びつけにくい日本語を遠回りに習っている。使う場面を習わない。
- ・教室で現実の疑似体験を行う。教室内の活動を教室外の活動に結びつける。
- ・本物らしさ、想定される現実場面を意識することが重要。
- ・学習者の求めているニーズを確かめる。
- ・「サンキューカード」がとても参考になった。
- ・達成感を感じさせているか反省した。
- ・学習者のニーズにどこまで応えられるか。学習者の自己実現を通して、教える側も実り多い達成感を得られる。
- ・Can-do の実践のとり入れ方。ファストフードの場面を想定した会話を考えたこと。
- ・英語を勉強した時の使える文法（例：過去形など）は、日本語を教える時に使える文法の一つと聞いて安心した。私も時々使っていたので。
- ・Can-do に少し近づけた気持ちがあった。
- ・現実にボランティア教室に来る外国人は、「あいうえお」や「1.2.3…10」も知らないレベルである。もちろん留学生試験は受けていない。自分の夢を語る以前のレベルで、まずは、挨拶程度から始めている。
- ・「現実場面を意識した活動」の組み立て方が理解できた。
- ・感激や共感が学習を促進させることを授業に取り入れたい。
- ・飲食店などのマニュアルも、Can-do を意識して作ってある。
- ・「必要なことを最短距離で勉強する」Can-do の考え方。
- ・どこで使えるかを考えて活動を組む。
- ・Can-do 型授業をやって、どんなよいことがあるのか。→ 例えば達成感を得られること。
- ・本物の勉強をしているという充実感。
- ・日本語社会の日本に来ている学習者は、現実結びつけにくい日本語を遠回りに習っていることにならないか。
- ・感激や共感は学習を促進させる。
- ・教室での学びがよくでき、教師にとっては優秀で満足な生徒であり、本人もそう思っているだろうと考えがちだが、全くそうではなかったという話。
- ・学習者の要求が無理だと思っても、ボランティアは乗り越えてほしい。自律学習への橋

渡しが必要。

- ・「サンキューカード」や「日本人観察日記」をすぐにでも取り入れて、現実結びつく勉強にしたいと思った。
- ・学習者の「Can-do」を日本語習得の中心にすえ、それですすめた点。
- ・実経験をふまえた実践的な Can-do の考え方を教えていただき、大変参考になった。
- ・「サンキューカード」の考え方は、テーマを変えて「現実場面を意識した活動」を活用してみようと思う。
- ・Can-do の本質を、これ以上の説明はないと思わせるほど、平易で楽しく話を進める講師の力量に感激した。
- ・とても楽しくすばらしい授業だった。
- ・中学生を現在教えている。日付の練習のさい、家族の誕生日をたずねるのだが、家族の誕生日が近づいた時、サンキューカードを作ってみようと思った。
- ・グループワークの時、盛り上がって楽しく、なかなか話が終らなかった。
- ・パワーポイントもわかりやすかった。
- ・日本語教室では、はっきりした目標をもっている人は少ないが、実体験からの話はわかりやすかった。
- ・グループワークで多くの文型やことばを抽出でき、整理しやすく、Can-do が理解できた。
- ・Can-do の概念は理解できたと思うが、それをどのようにとり入れていくのかが、むずかしいと思った。
- ・示されたマニュアルは Can-do を意識している。
- ・人を笑わせる、という Can-do もある？

第4回「地域日本語教育における優先課題とその問題意識」で特に印象に残ったこと

- ・演習がふんだんにあって、息つく暇もないくらい充実していた。
- ・自己紹介はどんな時にするか、を思い出すのに苦労した。
- ・対話を中心とした活動の具体例がわかりにくかった。
- ・地域日本語教室の役割。
- ・Can-do を実現するための対話中心の活動。
- ・「出来る」ために、教えるべきことを絞り込むことの難しさに困った。
- ・多人数で案を練ると、思いもかけない意見が出ておもしろいと思った。
- ・Can-do の授業とは何か。
- ・自己紹介も実社会でどのような場面で使われるかを考えて、実際に使えるような日本語を教えること。
- ・自己紹介が実は通り一遍のものではなく、Can-do 型のコミュニケーションになるという点。
- ・行動体験はいろいろと考えてみると、Can-do 型授業で使えるものがたくさんあるという

点。

- ・グループ活動することが久しぶりだったので、とてもおもしろかった。
- ・ボランティアと地域住民との協働をあらためて大切だと思った。
- ・自己紹介の場面を考える。
- ・地域日本語教室の社会の中での位置づけ。
- ・授業を通じて、各地域における日本語ボランティア活動の状況を知ることができて興味深かった。
- ・発表の順番がユニークであった（朝早く起きた人、髪の毛の一番長い人等）。
- ・グループワークでしっかり絞られた。ボーッとしてられない。
- ・なんとなくやっていることを、きちんとまとめなければならないことに気づかされた。
- ・グループワークで、他の教室の様子が垣間見えておもしろかった。
- ・自分が気づけなかった「スイカのチャージをする」を他グループで発見。これも必要。
- ・グループワークで話し合いながら進めると思考が広がる。
- ・地域日本語教育システムにおいて、「生活者としての外国人」と対話する最先端者が私達ボランティアで活動する人である。
- ・活動における3つの原則が、対話中心の活動につながっていく。
- ・「対話中心の活動」について。
- ・近年の日本語教員事情について。
- ・地域日本語教室のシステムについて。
- ・学習者のレベルによって、Can-do 型授業では教え方が違ってくるように思った。タスクをやってとても大変だと感じた。
- ・「おしゃべり」ではなく、日本語を使う意味を考える。
- ・対話を中心とした活動。
- ・公共の乗り物を利用して目的地まで行ける実際の場面を想定した時の問題点が多いことに気づく。
- ・一人で目的地へ電車で行ける。
- ・「自己紹介」を「Can-do」場面で意識したこと。
- ・Can-do 型とはどんな授業活動なのか、(自分で) 他人に説明すること、話し合うことの難しさを痛感！頭が固くなっている。
- ・知識から、「～が出来る」にはいろいろなかたちの Can-do 概念を考える。
- ・「対話中心の活動」は教室だけでなく、家族、地域、職場にも広げていくことを目指すことが必要である。
- ・日本語教室によっては、「学習者が自分が勉強したいレベルをえらんで、ボランティアはその希望に沿って教える」というシステムになっているところがあると聞いて驚いた。
- ・各項目でグループワークをしたことがとてもよかった。友達になれた。他の地域の日本語教室の状況がわかった。

- ・行動・体験中心の教室活動。
- ・自己紹介は、場面によって多様である。
- ・対話中心の活動は、「おしゃべり」ではなく対話にする。
- ・日本語ボランティア活動の目標は、ボランティアにしかできないことをやる。
- ・日本語学習支援システムのコミュニティ活動の最前線にいるのは、ボランティアである（だから責任が重い！）。
- ・グループ活動をして発表をする作業（面白かった！）。
- ・ワークシートの整理がうまくできなかった。
- ・地域日本語教室での指導。表現を単に「知っている」のではなく、それを使って「～が出来る」ようになることが重要。
- ・日本語でできることを増やす。
- ・ことばの学習の目標を達成するために、ボランティア指導員は何を手伝えるのか？
- ・今日は動き回る授業で楽しかった。
- ・自分たちが日常使っていることばを、いざ書き出すと思いつかなかった。
- ・対話を中心とした活動の重要性。
- ・現在、自身が活動している教室の課題の洗い出し。
- ・Can-do に結びつけた実践活動の難しさを実感した。
- ・目的達成までの手段を、KJ法を使ってまとめた点。
- ・授業の手順を踏んで目標に到達するため、個々の手法を考える進め方に興味をもった。
- ・対話中心の活動は、日本語を使う意味を考える。
- ・教室の外で学習者が実際に目的を遂行できることを目指す。
- ・ただの「おしゃべり」を「対話」にステップアップさせる。
- ・学習者だけでなく、ボランティアも何かを学べる活動でありたい。
- ・知識を増やすだけでなく、日本語でできることが増えるようにする。
- ・社会と繋がるための自己紹介ができるようにする。
- ・日本語ボランティアでなければできない活動をする。
- ・具体的な例を出してもらえるとわかり易かった。
- ・外国人が日本で快適に暮らすにはどうしたらよいかを考えて日本語指導をする。
- ・学習者に日本語を指導するだけでなく、指導する者も「わかる日本語」を心がける。
- ・実際の場面を考えて、それを教室活動につなげるのが、いかに難しいか考えさせられた。
- ・他のグループの発表を聞くのも参考になった。
- ・よりプラグマティックな授業！をリアルに考える。
- ・Can-do 型授業の目的は理解できても、具体的な教え方に展開することは難しい。
- ・実践的な内容でよかった。
- ・グループで話すことでより整理できたと思う。

第5回「ボランティア日本語教室での効果的授業活動例について」で特に印象に残ったこと

- ・常に目的をはっきりさせておくことが大切である。
- ・伝えたいことを即座に伝えることが大切である。
- ・パフォーマンスを磨かなければ、上手な指導はできない。技術の育成！！
- ・「どうしたらいいですか？」を使えるようにしてもらうことを目的としたが、答えが聞き取れないことが多々あるはずなので、その先の「もう一度、ゆっくりお願いします」などを加えればよかったと思う。
- ・グループワークでは話し合いの時間が足りず、十分とまではいかなかった。
- ・模擬授業では、学習者に扮した日本人でさえわかりにくい授業が多いと感じた。
- ・わかりやすい授業を考えるのは難しいと思った。
- ・活動の目的は何かということを考える（忘れない）。
- ・学習者のニーズを知ることが必要である。
- ・ふり返りをするのが大切である。
- ・仲間との情報共有をする。
- ・Can-do 型の授業の目的は、「学習者に必要な行為のための練習」であること。
- ・目標を達成するために最低限必要なことばや活動にすることの大切さと難しさを知った。
- ・模擬授業を通じて、教えるときどんな点を考えるかを出し合ったのが有意義であった。
- ・授業でどういうことを伝えるかということが考えられ、なされているかが重要である。
- ・模擬授業の発表の時、説明が多すぎたり、長すぎたりしたことを反省した。
- ・先生から受けた IPOD の効果的利用のアドバイス。
- ・各グループの模擬授業は短時間にもかかわらず、それぞれ興味深かった。
- ・学習者役以外に対する模擬授業の流れなどの説明が多かったように感じた。
- ・学習者に対するイメージトレーニングができた。
- ・活動計画（全体） FIRST THEN（各回のもの）がわかった。
- ・ボランティアは、学習者の行動についてイメージトレーニングすることが大切である。
- ・「学習者のことを考える」のは、「学習者同士の会話を聞く」ことも有効である。
- ・地域で学習者に会って困っているとき、やってあげるのではなくサポートし、後日、正しい日本語を教える。
- ・ボランティアの仲間同士で「一行日誌」を回したりして、お互い共有できるようにする。
- ・気づかせ方、感づかせ方の授業が大切である。
- ・準備してきた写真を実際に使おうとして、流れを組み立ててみると、意外に使えない場面があったりして、考えることと、実際にやることとは違うことに気づかされた。
- ・他のグループの模擬授業を見て、とても参考になった。
- ・模擬の時、学習者の活動が少ないグループが多かった。
- ・自分のグループの模擬授業の発表も、目的にあった Can-do にはまだ足りないと感じた。
- ・実際の場面で使うことばを迷ってしまい、まとめるのに時間がかかってしまった。

- ・模擬の発表の時、スイカ購入の途中で駅員に聞くと流れが違って、本来の予定である券売機に戻すのが大変だった。
- ・対話中心の活動の流れの方法を繰り返し実践したい。グループに分かれ、講師と学習者の実際の学習体験は大変役に立った。
- ・私達ボランティアは、模擬の発表を見て、説明が多すぎるのがよくわかった。
- ・まず、学習者にとって必要な行動を考、イメージトレーニングすることが大切である。
- ・模擬授業の発表で感じたことは、覚えるフレーズがそれほどたくさん必要ないということである。
- ・模擬授業の発表の際、質問した相手のことばが聞き取れないということがあった。聞く人の役割を限定するとよいかもしれない（駅員、おまわりさん、売店の人）。
- ・グループ活動の仕方の難しさを感じた。つい他人任せにしてしまう。
- ・与えられたテーマの活動発表は、いろいろ変化があり、おもしろかった。
- ・自分でやってみて中途半端になってしまったと反省。ポイントがずれてしまった。
- ・「講座の恥はかき捨て」ということばでほっとしたが、もっと勉強せねばと実感した。
- ・実践するための有効な「材料」を集めることが大切。
- ・学習者からの情報をよく聞き、気づくこと。
- ・模擬の発表 15 分の予定が 5 分になったので、短い会話文にするのに手間取ったが、実際にやってみると、5 分間にまとめるのも難しかった。
- ・模擬のために教材をたくさん用意されていたグループもあり感心した。
- ・自分のグループの中でいろいろな話ができることがよかった。[1 つの目的について話し合う反省点や感想 etc]
- ・Can-do の授業の実践がいかに難しいかが分かった。
- ・自己紹介は、目的・対象を考えることが大切である。
- ・トピックは、相手が変われば同じものを使える。
- ・活動の目的をしっかりと頭に入れて授業を行う。
- ・自分の活動を振り返る。
- ・活動を共有するために活動記録を書き、共有する。
- ・グループごとに（1人で電車に乗って目的地に到達出来るを）模擬授業をしたが、それぞれの切り口が違っていて、おもしろかった。
- ・説明をくどくどするとわかりにくい。
- ・教案で計画したことを指導する段になって、うまく学習者に伝わっているか、伝えているかが「不明」になっている。その理由は、説明が多すぎる。その表現を使う必然性がとらえられていない。
- ・目的・対象は何かを考える。
- ・相手に伝えられたことより、相手から受け取ったことが多い活動が素晴らしい。
- ・ボランティア同志で振り返りをしたほうがよい。

- ・5分間のグループでの模擬授業の発表は、反省点が多かったが、勉強になった。
- ・実際にボランティア歴のある人たちでも、ことばで目的を達する Can-do ができていないと感じた。
- ・模擬の時、導入の意味（「～んですが」でわからないことが質問出来る）の確認のないまま練習させていた。
- ・何のために今の活動をしているか、いつも意識すること。
- ・即座に気づかせられる指導法の大切さ。
- ・授業計画を立てる時、場面、学習者のレベル、特性、目的を明確にすることが重要である。
- ・目的を具体化すること。例えば、「質問することが出来る」。
- ・学習者のニーズに合った場面を設定すること。
- ・授業計画を立てる時、全体の流れを押さえること。
- ・もう少し模擬授業に対する作業時間がほしかった。全体に早い感じがした。
- ・先生の指示がうまく理解できなかったことへの反省。
- ・Can-do の実践がいかに難しいか再確認できた。
- ・イメージトレーニングが実践できたこと。
- ・明るく楽しかった。
- ・グループでの作業の条件が急変するのでオロオロした。
- ・説明を最小限に絞った展開が必要と思われるが、実際には困難であることを認識した。
- ・仲間との振り返りは有益である。
- ・今の活動の「目的は何か」を忘れないこと。
- ・活動中が一番楽しいことが大切である。
- ・イメージトレーニングをたくさんするために情報を集める。
- ・自分のやった授業を振りかえる、ボランティア同士で共有する。
- ・模擬授業のどこがよいか悪いか考えながら見るのは、とてもためになった。
- ・模擬授業の発表では、教材の使い方がどこのグループも下手だったと思う。
- ・ボランティア活動中（授業中）、常に今日の目標を頭に入れて組み立てること。
- ・今「何をしているか」をわかっていることが大切である。
- ・「やりっ放し」でなく、必ず振り返りをする事。
- ・模擬授業は、各グループとも写真などを多用して、場面設定を身近なものにしていたのがよかった。
- ・モデルケースが対話型になっていたのがよかった。
- ・Can-do を意識して、みんなで教案を作るのはまだまだ難しいと感じた。
- ・説明するのではなく、学習者を「巻き込む」ことが大切である。
- ・学習者のためになるトピックスを見つける必要がある（自分目線ではいけない）。
- ・相手のことを考えて、活動は大きな枠で組み立てる。

- ・振り返りについてだが、地域のボランティア間では、人間関係のバランスもとらなければならなかった。
- ・授業では、いかに説明をしているのかがよくわかった。
- ・根本的に日本語ボランティアは、文型を説明することが教えることだ！と思っているのでは？と感じた。
- ・5分の模擬は各グループの特徴がよく出ていたが、まだCan-doに慣れていないと感じた。会話を見せても、ただ読んでいだけで自然さがないと思った。
- ・常に「到達目標」を念頭に入れ、各回の授業を行う。
- ・もっとパフォーマンスを！
- ・「説明すれば伝わる」は幻想！！

第6回「教室活動の授業デザイン例とその実践法」で特に印象に残ったこと

- ・楽しいことをしているんだという気持ちで、元気にやるということを心がけようと思った。
- ・会話例文の練習では、反応を返すことが大事である。
- ・シンプルな答えが返ってくる質問を例文にするとよい。
- ・授業の流れのイメージが分かったような気がする。
- ・模擬授業について、スキットに使うセリフに幅や揺れがあつてよいということ。でも、後々の応用を考えれば、「文型」が埋もれていたほうがよい。
- ・日本人が確実にシンプルに答えてくれる質問を考えることの難しさを感じた。
- ・漢字に対する考えさせ方（漢字圏の学習者「難しい」、非漢字圏の学習者「易しい」）
- ・拍意識の重要性の再認識（最近少し疎かにしていた）。
- ・「て形」は14課の前に既に使っているということ。以前は教科書をベースに、既習・未習にこだわっていた。
- ・授業はデザインに沿って行う、ポイントはおさえて、単語も拍を意識して教える。
- ・学習者への指示の出し方は、工夫が大事である。
- ・学習者に出す指示は明確であること。指示の意図を分からせること。
- ・Can-doは、どんな感情を込めて、仕草を添えたら分かってもらえるか、ということが重要なポイント。
- ・長音は、特に拍意識をもたせて教える。
- ・授業終了時の振り返りシートを作成するとよい。
- ・構文にとらわれすぎないこと。自動的に発音される方が大事である。
- ・シンプルな返事が来るような質問の形を教える。
- ・便利で役立つ文例をひねり出すことは難しい。
- ・発音は拍意識・特殊音素を意識して教える。
- ・学習者を子ども扱いしないこと。

- ・学習者の発話に教師は、きっちりことば・態度・動作で対応する。そうすることで、学習者はできたと感じる。
- ・先生の模擬授業は、子どもを相手に日本語を教えている自分にとって、とても興味深く感じた。
- ・教室活動のデザイン「イメージの提示」。外国人が必要としている場面を考える。
- ・体験型は何のために役立つか。言ったことに対し、相手がきちんとリアクションしてくれたかが重要である。
- ・Can-do では、文型をはずすと「決まり文句集」になってしまう。文型の体系的なものを把握させて、実際にいろいろな言い方に発展させる。
- ・単語の指導は、できるだけ授業時間内は母国語を思い出させないようにした方がよいので、翻訳は避ける。
- ・日本語の音からダイレクトにその単語の意味が発想できるようにしないと、会話は間に合わない。
- ・学習者に対してパーフェクトを期待しない。
- ・学習者が発話したことが、相手を自分の要求通りに動かしたかどうかが大切。
- ・学習者が発話したら、必ず教師はリアクションをする。
- ・語学教師は、芝居気を持たなければならない。
- ・私達が勉強した頃は、日本語の文章体では、疑問文の場合も「～か。」で終わらせ、クエスチョンマークをつけ「～か？」としないといわれていた。私達はクエスチョンマークをうちわに書き、板書した「～ですか」を読む時、このうちわを後につけて学習者に見せていたが、初めから「～か？」と示した方がわかりやすいと思った。
- ・ホワイトボードの使い方を具体的に見ることができてよかった。
- ・振り返りシートを使ってみたいと思った。
- ・初級者の流暢さとは「立板に水」ではなく、語学教育の中では、「ぎこちないこと」「感情がこもっている」等がクリアされていけばよい。
- ・単語だけでも文の力をもっている。例 火事（火事だからすぐ逃げなさい）。新宿（私は新宿に行きたいです）。
- ・Can-do の文例をひねり出すのは難しいが、この文例こそ、日本語を教える生命線（外国人の生活を助ける）である。
- ・単語の提示、拍意識の重要性についての話。
- ・小さいボード、絵など小道具を使ってわかり易い教え方をすることが役に立った。
- ・一人二役、声のトーン、動作なども有効に使うこと。
- ・外国人が居住し、生活している場面で役立つことをポイントにする。
- ・行動に必要な文例、文型の提示。（こう言うと、こう答えてもらえることを経験）
- ・スキット作成では、日本人が質問を受けた時に、シンプルな返事が期待できる言い方にする。

- ・基本文型が埋め込まれているものは、応用発展できる。
- ・Can-do の意味は少し理解できた。
- ・授業に、場面・会話に連想づけられた単語の提示を取り入れる。
- ・写真より絵のほうが効果的である。
- ・後で使い道のある文型を選ぶ、など話を聞いたが、実際の授業になると、デザインするのがとても大変だと感じた。
- ・Can-do 型の授業の流れがはっきり見えてきた。
- ・5本指を使った拍の教え方が興味深かった。
- ・実際の教え方の指示がとてもわかりやすく、すぐ使えそうに思えた。
- ・「振り返りシート」をさっそく教室で使ってみようと思う。
- ・単語の意味を理解させるのに「5秒」というのは、はっきり意識してやってみたい。
- ・拍の練習のとき、指を使うやり方がおもしろい。
- ・現在実施している Can-do 型授業に、細かい点でいろいろ参考になった。
- ・「振り返り」を取り入れるには、どうするか考えたい。
- ・いつも生活の場面に注意し、何をどう使うかを見出す。学習者の必要とする場面・表現を見出すことになる。
- ・授業の流れが具体的にデザインできた。
- ・シミュレーションの授業では、学習者に何ができたか実感させる。
- ・スキットの会話を考える時には、シンプルな答えが期待できるものにする。また、一般的な状況で考える。
- ・いろいろな説明は必要なく、感づいてもらう。
- ・スキット間のカードをたくさん用意して順序に従って貼ると、とてもわかりやすく、自然に覚えられそうな気がした。
- ・絵の効果はとても大きいので、いろいろと探して教材にしようと思う。
- ・Can-do では場面に応じて学べるので、学習者にとっては実用的だと思うが、教える方はその場面ごとの文法を把握していなければならず、テキストを使って教えるよりも、知識と経験がいると感じた。
- ・スキットは表情をつけて役になりきる。
- ・授業は笑顔で、楽しいことをやっているという意識が大切である。
- ・質問は、シンプルな返事が期待できるものを提出する。
- ・言い回しを考える時に文型を使う。
- ・学習者の教えてほしい場面を設定する。
- ・実際に相手に伝わり、返事がもらえる会話を考える。
- ・文法は必要であるが、説明はいらない。
- ・目で見ればわかればよいという範囲で、漢字（駅名等）も入れる。
- ・音だけでなく、文字が必要である。

- ・単語のモダリティ、発話意図の重要性。
- ・Can-do のシチュエーションは、ごく一般的な社会生活の営みを反映しているべき。
- ・できるだけシンプルにすること。いろいろ余計なことを教えないこと。学ぶべき表現の機能が学習者に伝わりにくくなる。
- ・Can-do 型の授業では、生活の中でどこでも通用する便利な言い方を教える。
- ・本当に必要な情報がわかる表現がよい（この場面はこの言い方）。
- ・日本人が聞かれた時、わからないセリフは避けた方がいい。
- ・例文の中で使えるものは使って、文型はぬかさない。
- ・「約束・誘い・質問できたね」までの確認をして Can-do になる。
- ・ビジュアルにして、見てすぐ分かる工夫が大切。精一杯のビジュアルと演技。声に表情。
- ・最後に振り返りが必要。今日やったことの確認をする。
- ・教師の出した Q に学習者が答える場合、さらに教師はリアクションを返す。それが Can-do になる。
- ・Can-do のイメージを実践で初めて見るのができた。
- ・Can-do に使われるセリフのことばを自分で見つけることは難しそうだ。
- ・教室内で体現の約束をもう一度確認したいと思う。
- ・時々学習者から「日本人はそう言いません」と言われることがあり、用意することばのシンプルな授業を心がけたい。
- ・「～へ行く」を実際の教室風に実演していただき、大いに勉強になった。
- ・授業終了後に振り返りシートで、今日やったことをもう一回とらえなおす。客観的に知識として確認、定着させる。
- ・対話練習の際、相手のリアクションがあつて、初めて「できた」と実感できる。
- ・実践だから、構文の理屈にとらわれないように。
- ・質問の表現は、日本人が素直に受け止められて、シンプルな返事を期待できるものがよい。
- ・文法を教えても話せるようにならないが、文法がいらぬというのは極論。
- ・文字は早い段階から提示してよい。
- ・先生の模擬は、途中で説明が入ったが、通して見せていただきたかった。
- ・単語一つにもモダリティがあること。
- ・Can-do 型の文型が学習者の動機づけに結びつくこと。
- ・常に「今何をしているか」、「今何をしたらよいか」がわかる授業活動をする。
- ・導入文型には、言いつばなしでなく、必ずリアクションがあること。
- ・指導する際にも、教師はリアクションをすること。
- ・授業終了時に振り返りシートで確認する。
- ・文字は最初から提示する（視覚で訴える）。
- ・「文」のひねり出し&ジェスチャー（=体現）。それが、「求める」「re-action」へとつな

がる。

- ・構文の教科書の文型を意識しながら、Can-do の例文を考える手順が理解できたような気がする。
- ・ことばでは理解できないことが多いので、visual に見せることが必要である。
- ・地域の生活場面は、日本文化が基盤であることをふまえることが大切。
- ・見てすぐわかる授業の準備が必要（できるだけ効率的にすること）。
- ・易しいことばを教えていても、大人が相手だったら、人格を尊重すること（子ども扱わないことが必要）。
- ・語句の意味などは、あまり解説しないこと。
- ・「V たいんですが」という表現で、いろいろな機能を実現できる。便利な表現である。
- ・模擬授業は大変興味深かった。
- ・質疑応答の様子で、Can-do 型授業を全ボランティアが体得するには時間がかかりそうだったと思った。
- ・拍・特殊音については軽く見ずに、繰り返し練習させることが大切。
- ・受験英語の呪縛から逃れられない人の何と多いことか。答えは一つではない。その中で日本人が使う最も頻度の高い、自然な表現を教えるべき。このことを心がける。
- ・授業の流れはわかりやすかった。前回の模擬とは違う表現だったが、基本的には同じなのがあった。
- ・模擬は実践的でわかりやすかった。
- ・会話文を板書すると、なかなか覚えられない学習者には助けになるが、単に読んでしまう恐れもある。板書を見せないタイミングも大切だと思う。

第7回「地域日本語教室で必要とされるコミュニケーション能力の開発」で特に印象に残ったこと

- ・「能力をつけてから活動するのではなく、活動することによって能力がつく」に、ちょっと安心した。
- ・聴くことで大切な「待つ」が、せっかちな私には非常にかけていると反省した。
- ・辞書的な意味とコミュニケーションを通じた意味の違いに納得。自分が写っている写真は有効。
- ・会話と対話の違い。相手にわかるような心がけが必要。
- ・レシートや冷蔵庫など、トピック例が本当に身近で話しやすいものだった。
- ・学習者とのコミュニケーションをよくするためには、日頃のコミュニケーションが大切だったと思った。
- ・生活用品（私の家の冷蔵庫の中身）やレシートが、トピックになるとは意外だった。
- ・コミュニケーションをするためには、まず自己開示をすることが必要である。
- ・学習者とボランティアは、対等な関係であることが大切である。

- ・相手の話を聴くことの大切さ。日本語教室という、ある意味特殊な場も基本は人間だということ。
- ・コーディネーターの存在の意味。教室運営全てに目をかけてくれる人がいると、本当にありがたい。
- ・自分のコミュニケーション能力で備わっているもの、開発したいものを振り返ることができた。
- ・人間関係を構築するためには、自己開示が必要。
- ・トピックは身近なものから → 自己開示 → 人間関係ができる。
- ・コミュニケーションは、正しく伝えるだけが大事なことではない。練習するよりは使う活動。活動や使うことによって能力がつく。
- ・多文化共生の基盤作りのためには、能力のある少数の日本人よりも、一人でも多くの日本人の参加が必要であること。
- ・一般的なことよりも、個人的なことを話す方がコミュニケーションの活性化につながるということ。
- ・ボランティアと学習者の座る位置（特に1:1の場合）も大切。
- ・コミュニケーションの活性化が必要である。
- ・学習者が言いたいことが出てくるようなトピックを用意すること。
- ・ことばは、言いたい人と言いたいことを言わせる人が一緒に見つけていくもの。
- ・対話の展開の道筋を作りながら発話を促すこと。
- ・学習者には、自己開示が大切な要素となる。
- ・相手（学習者）の話すことに対して、ボランティアは待つことが大切である。
- ・ボランティア自身が話し続けてしまうことの戒め。
- ・日本語教師は、活動することによって能力がついてくるもの。
- ・コーディネーターの役割……私たちのグループには、先生のおっしゃるようなコーディネーターはまだいない。
- ・トピックは一般的でないものを、個人のことを提供するということ。
- ・傾聴ということの大切さを知った。
- ・『すぐ使える活動ネタ集』を参考にしたいと思った。
- ・＜良い聞き手＞相手の言ったとおりに繰り返す。⇒相手に親切的な聴き方：学習者が自分の言ったことをモニターできる。
- ・ボランティアは、相手に対し質問攻めをしない。学習者の発話チャンスを削ぐことになる。
- ・まず、自分のことを生かし自己開示、学習者に心を開かせ発話を促す。
- ・どんな優れた市販の教材を教室で使うより、ボランティア自身にかかわる教材を使用したほうが、学習者は関心をもつものである。
- ・言語は「練習する」より、「使う」ことによって身につくものである。

- ・会話のトピックは、身近で具体的なトピックを使う。
- ・これからのことよりも、これまでに体験したことの方が話しやすい。
- ・ことばは辞書的に教えるより、ボランティアが自己開示をして、自分個人のことを例に出して具体的に教えたほうが学習者にはインプットし易い。
- ・コーディネーターの役割は、大変なものだと思う。
- ・正式なコーディネーターはいないが、自分でコーディネーターのようなことをしていることが多い。
- ・コミュニケーションの能力の話がメインだったと思うが、コーディネーターについての内容も多く、やや焦点が見えにくかったのと、コーディネーターという役割がもう一つわかりにくかった。
- ・コミュニケーションに関しては他でも勉強しているが、再確認ができた。
- ・レシートを使つてのレアリア教材は参考になった。
- ・一般的なことより、個人のことを話す方が学習者へのインパクトは強い。
- ・コミュニケーションし易いトピックとして即答できるのがよい。
- ・解説はボランティアではなく、学習者にやってもらったほうがよい。
- ・日本語教師におけるコーディネーターの役割や重要性が理解できた。
- ・日本語を教えることで日本人自身も変わり、外国人と対等な関係を結べるようになることが必要だ。
- ・よい聞き手とは、相手の言っていることをそのまま受けとめて確認することができることである（クレーム処理を参考にする）。
- ・できるだけ一般論を説明するのではなく、自分自身の個人的な体験を説明すると、相手の心を開き、対等な関係を作ることができる。
- ・トピックを選ぶときは、「夢」や「趣味」などは意外に難しく、過去の経験を選んだほうがよい。
- ・地域日本語教室で必要とされているコミュニケーション能力。
- ・よい聞き手になり、相手の目を見て話しながら、本当に話したいことを話してもらい、信頼を得ることが大切。
- ・彫像のような聞き手。上の空の聞き手。割って入る聞き手。オウム返しの聞き手を実際経験し、感想を述べたこと。
- ・外国人とのコミュニケーション能力が高い人が入門者と対応するとよい。
- ・意識の整理（コミュニケーションを促進するもの、コミュニケーションを疎外するもの）。
- ・相手が理解できる日本語で話す。
- ・コミュニケーションし易いトピックについて、誰でも話題にできるもの（経験は即答できる）。
- ・活動し、使うことによってコミュニケーション能力がつく。
- ・初心者だから分からないと思わず、初めから本物を提供する。

- ・コミュニケーションのためには質問だけでなく、まず自分のことを話すということ。
- ・対話とは、相手がわかるように説明し、伝えることである。
- ・話し手、聞き手の役割をして、よい聞き手について考えさせられた。
- ・対話をスムーズに引き出すトピックの重要性。
- ・忘れがちになっていたコミュニケーション能力について、あらためて考える時間となった。
- ・自分もっているコミュニケーション能力について考えさせられた。
- ・いろいろな「話す」「聞く」を体験し、あらためてそれらを意識した。
- ・ことばの意味をしっかりと刻みこめるように、ボランティアが自分のことを題材にする。
- ・トピックの選び方～「うちの冷蔵庫」は意外だった。「～の中に～があります。」の時には使っているが。「ことばは使うことによって身に付く」。
- ・先生の話の仕方がはっきりゆっくりで、とても安心して話を聞くことができた。
- ・能力をつけてから活動をするのではなく、活動をして日本語を使うことによって能力をつけてもかまわないのではないか、という意見に励まされた。またいつか、話を伺いたいと思った。
- ・コミュニケーションを促進するものは笑顔、阻むものは不安。
- ・辞書的な意味ではなく、エピソードを提示することで理解してもらう。
- ・会話と対話は違う。外国人とは（日本語教室では）対話をする。
- ・ボランティアは、能力がついてから活動するのではなく、活動しながら能力をつける。
- ・ことばは使ってこそ身につく。
- ・ボランティアは、自分の写真を使い、自分のことを話すのがよい。
- ・話すこと＝よく聴くこと。相手の話を傾聴するー相手の話を確認するー相手の話を待つ（反省点 先回りして話す）。
- ・初心者とのコミュニケーションのための手法。
相手から話題を引き出すこと。 → 質問してではなく、まず自分のことを話す。
- ・多文化共生社会の基盤作り。
- ・教室の中に教室外の関係者を入れるのも一つの手。
- ・教室活動に教室外の場に持ち込む。体験学習型。
- ・コミュニケーションの活性化。トピック選び(うちの冷蔵庫、買物でのレシート)。
- ・話題は発展して変わってもいいから、言いたいことを言ってもらおう活動をするにつきる。
- ・よい聴き手とは学習者が何を言いたか、配慮しながら聞ける人。
- ・日本語教室の時、自分自身が生活者としての日本人として、自覚をもって生活者としての外国人と向きあっていたか。
- ・心を開かせるには、まず自分から自分について話す。
- ・学習者は自分より日本語能力が劣るだけ。ボランティアとして学習者を知るにしたがっ

- て、相手の素晴らしさを感じる。
- ・ 辞書的な意味ではなく、コミュニケーションを通じた物のインパクトの強さ。個人的なことで話す。
 - ・ ボランティアと学習者の関係だけでなく、生活者としての「外国人と日本人」との対話という観点が重要である。
 - ・ 学習者の言いたいことを感じること。
 - ・ 身近なことを話す。
 - ・ 学習者に発表の場を与えること。
 - ・ 相手に「もう一度言ってください。」と言っていたことを反省した。「もう一度」は相手が「ドキッ」とすると聞いて、待つことを忘れないようにしたいと思った。
 - ・ レシートの使用の話はとても納得した。
 - ・ お互いにコミュニケーションの取り方をどう始めるか、再度勉強したいと思った。
 - ・ 話して伝わったら、学習者が理解できたとは限らない。
 - ・ 自分のコミュニケーション能力について分析できたこと。
 - ・ コーディネーターを社会的な地位として確立すべきに賛成だ。
 - ・ 対話を通して言語を使う活動の必要性→Can-do へ。
 - ・ 言語は使うことによって身につく。
 - ・ 学習者が言いたいことの中から語彙を拾い上げ、取り上げて定着につなげる。
 - ・ ネットの情報や企業のパンフレットやチラシよりも、ボランティア自身の実際のこのの方に説得力があり、興味をもって見てもらえる。
 - ・ 教材として、家族の声を使って録音したテープなどはおもしろいと思った。
 - ・ トピックは誰もが答えやすいものを選ぶとよい。
 - ・ コミュニケーション能力が高いボランティアは、初心者向きである。
 - ・ 「家族」を教えるとき、絵よりも自分の家族の写真を見せた方が、学習者は積極的に見ようとする。インパクトがある。
 - ・ トピック選びは「これからのこと」より、「これまでのこと」を題材にする。
 - ・ コミュニケーションがスムーズにいかない時にするやりとりを考える。
 - ・ ボランティアのレベルではできないことがあることを自覚、確認し、表明する。
 - ・ ペアワーク、グループワークがスムーズにできた（課題、時間配分がわかりやすかった）。
 - ・ トピック選び方は身近な具体的なもの、実際に経験したものを。
 - ・ 通常、絵カードは利用しているが、自分自身の写真や材料は使わないようにしていた。今後は取り入れてみようと思う。
 - ・ 日本人とつき合うのも、学習者である外国人とつき合うのも、基本は同じで対等であるということである。
 - ・ ミスコミュニケーションは起こってもかまわない。
 - ・ コーディネーターの役割が非常に大切である。

- ・使うことによって能力が培われる（能力が備わってから「～しよう」というのでは遅い）。
- ・人間関係構築のため、自分の個人的なことから話していく方がいいという話は、なるほどそのとおりであると思った。
- ・聴き手の実習。とてもためになった。
- ・レシートをトピックに選ぶ例がおもしろかった。
- ・最初に書いた開発したい能力、備わっている能力について、講座の中でもう少し活用して欲しかった。
- ・指示がよく分かり、グループワークがしやすかった。また、時間が指示通りに切れ、時間内に終わらせるという緊張感もあった。
- ・教室活動の中で、Can-do の授業とコミュニケーション能力の開発との違いがよくわかった。
- ・自己開示によって相手のことを引き出す。できるだろうか。
- ・コミュニケーション力をつけることが会話能力に繋がる、ということが理解できた。
- ・地域の日本語教室は、学習者とボランティアとの関係ではなく、生活者としての外国人と生活者としての日本人との関係が望ましい。

第8回「文型中心型指導から Can-do 型実践文例へ」で特に印象に残ったこと

- ・会話のやり取りの経験をさせることが大切である。
- ・意味がわかっただけでは、できたことにならない。
- ・使いみちのある例文に直して教える。
- ・外国人の生活場面に密着した表現にする。
- ・特殊ではなく、一般的な場面を設定する。
- ・「形容詞+の」は、決まり文句として教えてしまう方がよい。
- ・「文型」から例文を考える際の留意点がわかった。
- ・外国人の生活場面に密着した表現で一般的なもの、応用ができるものを考えること。
- ・Can-do 型授業の例が参考になった（日本語なしでもなんとなくわかり感激した）。
- ・Can-do 文例の作り方演習（外国人の生活場面が思い浮かばずに困った）。
- ・反面的な意味での語用論の話は興味深かった。
- ・意味と使い方のギャップが理解できた。
- ・意味がわかる例文より、生活に密着したどういう場面で、どんな時に使うかを教えることが大事である。
- ・例文を作る時は「自分（日本人）が」ではなく、「外国人が」使う場面を考えなければならない。
- ・ことばしかできない行動があるということ。
- ・なぜ Can-do 型の日本語にしなければいけないのかが理解できた。

- ・ 文型の意味だけでは生活の中では使えず、使い道を生活に密着させたものに変えていくということ。
- ・ 言語行動、人間にしかできない言語によって行動できるということ。
- ・ 外国人には生活場面で使える文例を教える。
- ・ 特殊な場面だけ使う文例は生きてこない。
- ・ 一般的な場面、文脈を考える。
- ・ 外国人へのことばの説明では、文法解説は必要ない。物の置き換えで考えていくこと。
- ・ 例文の使い方における留意点が認識できた。
- ・ 相手に嫌な印象を与えない、嫌な感情をおこさせないような、円滑な人間関係を築ける言い方を教える。
- ・ レベルなどに関係なく、早い段階で「形容詞+の」を教えてしまうということ。
- ・ Can-do 型文型を考えることは、簡単ではないことがわかった（普段から考えておく必要がある）。
- ・ 外国人が、その日に少なくともひとつは役に立つ情報を与える。
- ・ 言語行動とは、ことばでしかできない行動、それは人間しかできない行動である。
- ・ 授業では単語カード（見せて直感的にわかる絵）を用いて、やりとりを経験させる。
- ・ 表情、言い回しを重要視し、考えて教える。
- ・ 例文の使い方の留意点（①外国人の生活場面、②生活場面に密着した表現、③広い応用例の可能な表現）。
- ・ 構文型教科書の表現は、Can-do として生活に密着した例文に直して教える。
- ・ 特定の場面でのみ使えるような表現は、例文として使わない方がよい。
- ・ 意味だけ通じるような文例を教えても、実際の生活場面では使えない。
- ・ Can-do 型実践文例の実際がよく理解できた。
- ・ 構文中心のテキストは、例文が現実から離れている。
- ・ 意味よりも使い方を考えて教える。
- ・ 一般的に通用する例文を作る。
- ・ 「みんなの日本語」をもう一度見直し、Can-do に沿った場面文型にする作業をしなければいけないと思った。
- ・ 具体的な場面に即した台詞を考えてみること。
- ・ 文型から実用的会話文を作る作業が難しいと思った。
- ・ 文型の意味ではなく、使い方を教える。
- ・ その文型にはどんな機能があるか、いつも考える。
- ・ 広い応用例の可能な表現を出すことが重要である。
- ・ 生活に密着した表現というものを常に考える。
- ・ 特殊な場面ではなく、一般的に通用するものを考える。
- ・ 自然で、しかもサバイバルに使う文を考え出すのが意外に難しかった。

- ・アフリカのことばを使用した模擬を見て、日本語ゼロの学習者がいかに苦勞しているか、少しわかるような気がした。
- ・△□×□語での導入を見て、動作、表情の大切さがわかった。
- ・構文教科書の文型は、生活に密着した文に直す。
- ・13課「ほしいです」「～たいです」は、自己紹介で使うくらいで、日常あまり使わない。
- ・Can-do 型文例を考えることは、とても難しいと実感した。
- ・ボランティア（困っている人を助ける）による日本語教室と日本語学校とは目的が違う。
- ・ことばがなくてはできない行動がある。
- ・Can-do 型を行うため、日常生活に基づいた会話を考えなければならない。
- ・文型は意味を教えるもの、その文型をどの場面で使うか、どのような機能をもたせるかを教える。
- ・実用型の日本語が使えるようにして、外国人の生活を助ける。
- ・恒常命題的遂行文「～は～である」。
- ・ことばの力が Can-do に繋がる。
- ・例文の使い方を教える時、外国人の生活の場面で考えること。そして、いつも使えるものであること。
- ・ことばしかできない行動、スピーチアクトの大切さ。
- ・外国人には日本のことばは難しい。数回聞いただけでは覚えられない（使えない）ということを再認識した。
- ・例文は、実際によく使われる場面を考えて作ること。
- ・文型から作った有効な機能をもった例文と、行動からのことばの言い方を統合すること。
- ・特殊場面ではなく、使えることば（武器・道具として）の必要性。
- ・ことばがなくなれば使えない（できない）行動がある。
- ・外国語での導入と練習を通して、学習者の気持ちになれた。
- ・機能をとらえた Can-do 型の例文の作り方、使い方の難しさを実感した。
- ・汎用性のある例文作りの重要性。
- ・文型と機能の両方が備わった Can-do が望ましい（一方だけでは不完全）。
- ・「形容詞+の」は日本人自身が多用している。
- ・中国語には「の=的」という用法があるから、中国人が「赤いのネクタイ」などと誤用するのはよくあることで、どの外国人もその国によつての誤用は見られると思う。
- ・文型指導は、どういう場面でそれを使う必要が出てくるのかが重要である。
- ・生活に密着した使い道のある日本語を教える。
- ・ことばを記憶させるより、やりとりをして経験させる。
- ・有効な機能をもった例文を考える。
- ・アフリカ語での授業は、生徒の立場になることができ、とても参考になった。
- ・作例研究において、生活場面に密着し、広い応用例の可能な例文を作ることは難しかった。

た。

- ・全く未知な言語を学ぶことの大変さと、同時に楽しさを実感した。
- ・ことばのうまい提示の仕方によって、学習者の推測で十分理解できる可能性を実感した。
- ・アフリカ語を使った模擬授業で、学習者側の経験ができた。
- ・日本人同士が相談しても、なかなか使い道が出ないのに、外国人にはもっと難しいと思う。
- ・はじめに構文教科書が前提となっている不幸。
- ・「～ほしいです」などの文型を、構文型の教科書に出てくる不自然な例文ではなく、「使える」表現、用法として自分で再構築し、それに沿って授業をすること。
- ・導入にどんな例文を使うかがとても大事であること。生活に密着した使える例文であること。応用可能であることが大切である。
- ・初めて耳にする言語は、簡単には口に出すことができない。
- ・ことばがなければできないことがたくさんあることを知った。
- ・実際に外国人の生活の中で使える例文を考えることはとても難しい。
- ・Can-do 型授業は語用論からとらえていく。
- ・文脈と場面を整えると、あらゆるナンセンスな文もある程度有意義な文となるが、広い応用が可能な文ではない。
- ・「自分の側から発する例文」を考える力不足を痛感した。

第9回「場面シラバスと会話の作例方法——行動の動機と欲求の視点から」で特に印象に残ったこと

- ・みんなの日本語中心の現状を Can-do へと変えていくには、徐々にしたたかにといい話。そうできるとよい。
- ・一緒に組む人がベテランで、みんなの日本語中心の方だとなかなか難しい。実用性の高い語彙であっても、「それはまだ先だから」と一蹴されてしまう。
- ・レベル A1 でさえ、今教えている学習者達は達成できてないことがわかった。
- ・明示的フィードバックと暗示的フィードバックの使い方を理解することができた。
- ・助けられるためのボランティアグループでなければならない。
- ・CEFR の Can-do Statement は、達成目標ではなく評価項目なので、Can-do 型授業のためには、具体的な例文を考える必要がある。
- ・似ている表現を教える時には、その表現を使う必要性・機能を考える。
- ・地域事情、文化の説明だけにならないように、日本語を教えるボランティアだということを忘れないようにする。
- ・例文の出し方、機能を見せなくてはならない。生活密着型で優先順位が決まる。
- ・Can-do 型の授業：どのような場面で、どのような機能をもたせたものかを考えること。

- ・例文はあくまでも一般的ではなく、生活密着型のものを考えたり、提示したりしていくこと。
- ・似たような表現の場合は、違いが浮かび上がってくるような例文でなければならない。
- ・Can-do 型授業をどのようにボランティア活動に活かしていくかが大切である。
- ・ボランティアグループのための日本語教育は危険である。あくまでも、外国人のための教育であるべきだ。
- ・「～のために、～のに」の使い方の違いを例文で示すことについての説明、及び「～そうです」の例文の使い方について。優先順位から判断して教える。
- ・似たような表現の違いを、どのように教えるかを考えること。
- ・文法が先にありきではない。
- ・ボランティア同士で互いに評価し合う。
- ・例文で似たような表現の時は、その違いを教えなければいけない。
- ・例文は、密着型サバイバル表現としての優先順に選択する。
- ・みんなの日本語 初級Ⅱは、新しく出た文型と、前の文型との違いを教えなければいけない。
- ・明示的フィードバックと暗示的フィードバックがある。
- ・外国人から、「ここで日本語を教えてもらって助かった／良かった」という感想が出てくるような指導をすることが大切である。
- ・学習者のニーズ調査は、1 回限りではなく、間をあけて適宜行う必要がある。
- ・「自分たちの趣味のためのボランティアにならないよう注意しなければならない。」との注意は、私達の役員会で時々話し合っていたテーマだった。自分の楽しみのために教室に来ているのではないか、人の役に立つことを忘れていないのではないか、というボランティアが、私達のグループにもいることに心を痛めている。
- ・明示的フィードバックと暗示的フィードバックを自然に使い分けていることに気づいた。
- ・「インパクトある教え方で、コンパクトに教える」は、とてもよいことばだと思う。
- ・ボランティアグループを変えていくには、共通認識をもち、正しい知見でできることから「徐々に」「したたかに」変えていかなければならない。我々は、その仕掛け役を任けている。
- ・コーディネーターの重要性と難しさを感じた。
- ・「できるだけ笑顔で教える」というのは、難しいが大切。
- ・ヨーロッパと異なり、会話や対話としての日本語教育がなされてこなかった。
- ・トピック中心の指導法は、講師が全文型などを把握しておく必要がある。
- ・外国人の学習ニーズは、滞在するうちにしばしば変わるので、頻繁にニーズ調査をしなければいけない。
- ・教師が自己開示をする意味は、それを通じて日本人を理解するきっかけにもらうためである。

- Can-do 型はどのような場面で、どのような機能がもてるかを教えることが大切である。
- CEFR の指針について、1. 多様性 2. 複言語主義 3. 民主的市民 4. コミュニケーション 5. 機会均等、公平性。
- 文型をどのような場面で埋め込み、教えるか。
- 機能をふまえて生活密着型の会話を教える。
- 対話における学習者のモチベーションを引き出すようなトピックの出し方の難しさ。
- 明示的フィードバックをしやすいが、暗示的フィードバックでもわかるように気をつけていこうと思う。「～が～たい」自動詞／他動詞の違いにより助詞が変わる。
- 場面シラバスの例文の出し方、生活に密着度合の多い物から出す。
- Q&A、各項目もとても詳しく、理解しやすい話でよかった。
- 学習者に「私のフランス語はC2です」と言われ、「AとCとどっちが難しいの？」などと質問したが、今日のCEFRの話で納得した。
- 前回のCEFRの話はすっかり忘れてしまっていた。理解するにはタイミングがある。
- 学習者のニーズ調査は1度で終わらず、絶えずやること。
- 学習者の学習に対するモチベーション、関心意欲を引き出すための工夫をすること。
- 例文を作るとき、生活密着で機能を際立たせられる文を考えること。
- 目の前の外国人の生活実態に合わせた日本語を教える。
- ボランティア日本語教室が、ボランティアのためのものではないということを肝に命じなければいけないと思った。
- 日本語ボランティアの真の役割を念頭に置く。
- 変革は急がない！徐々に！教師が互いに評価し合う場を設ける＝情報の確認＝単なる〇×ではない評価方法の構築が必要。
- 状況、場面、機能を考慮し、切実性があるものを先に教える。
- Can-do 型授業は個人ではなく、団体で行うようにする。しかし、いきなり変えると反発され危険。
- グループのためのボランティアになったり、外国人を助けられないボランティアになったりしないようにすること。
- 場面シラバスを選ぶ時は、機能の強いものを優先させる。
- CEFR のレベルは、本人がどこまでできているかの評価項目で、到達目標ではない。
- Can-do 型授業をボランティア会に取り入れる場合は、無理のない進行速度で。
- 『みんなの日本語Ⅱ』になると、前出したことばと似ていることばが出てくるが、違いをしっかりと教えること。
- 『みんなの日本語』の文型を教えるとは、その文型が学習者にとってどんな必要性があるのかを教えるということである。
- 地域の情報提供をすることが、日本語を教えることであると勘違いしてはいけない。
- 「文法先にありき」にならないようする。形態化するだけ。

- ・学習者と指導者が、Q&A の一方のみならず、モチベーションが保てるようにする。
- ・Can-do 型文型選びは機能から考えて、生活密着優先度及び似た文型は、その差異がはつきり出せるものを選ぶこと。
- ・機能重視の授業に変えていくには、ボランティア間でのコミュニケーションが重要である。その重要性について話し合うこと。
- ・質問に対する先生の真摯なお答えがありがたく、とても感心した。
- ・CEFR の概念を満たす Can-do に結びつける道が、少し解ったような気がする。
- ・教室運営に Can-do を取り入れる難しさを実感した。
- ・文法的意味を含みつつ、生活密着の文例を作るのは大変そうだ。
- ・自己開示は、自分に興味をもってもらえる程度に行う。
- ・インパクトある教え方をコンパクトにする。
- ・場面シラバスとしては、生活に密着した機能をもつものを選択する。
- ・目の前の外国人の生活実体に基づいた指導をする。
- ・インパクトのある方法でコンパクトに教える。
- ・徐々にしたたかに、人知れず Can-do 型に切り替えていく。助けられるボランティアでなければならない。
- ・先生（ボランティア）を通して日本のことを知りたい、個人を通して一般的なことを知りたい、と外国人は希望しているはず。それを学習のモチベーションとするのがコツである。
- ・例文は生活上切実なものを優先させる。
- ・外国人に「話したい」という動機を与えることが必要である。
- ・似たような表現がある時は、その違いが浮かび上がるような例文を作る。
- ・CEFR の A1～C2 のレベルは、評価項目であって学習目標ではない。
- ・「ヨーロッパ共通参照枠」の指針がよくわかった。
- ・Can-do 型の授業展開が具体的にわかってよかった。
- ・団体を「場面シラバス」型に切り替えるには、圧力をかけずに「徐々に、したたかに、人知れず、気がついたらそういう方向になっていた」という進め方が大切である。
- ・外国人のニーズも時の経過と共に変化していく。それに対応していくことが大切である。
- ・教え方を急激に変えることには無理がある。共通認識の部分を徐々に増やしていく。できることから変えていくこと。
- ・CEFR の目的と「Can-do Statement」の位置づけ。
- ・場面シラバスでは、一番使い道のある例文をだす。
- ・質問に答えるかたちを取りながら「CEFR」「Can-do」の話につなげていた。
- ・ボランティア同士、互いに評価できる関係にならなければ、よくなっていかないということ。
- ・急に変えるのではなく、時間がかかってもゆっくり変えていく（手順を踏んで）方がよ

い。人知れず、徐々に変えていくとよいが、とても難しいことである。

- ・ CEFR は、評価で目標ではない。
- ・ Can-do 型の文型を作る時は、常に機能が重要だ。幾度となく言われたが、最近やっとわかってきた。

第10回「到達目標と Can-do Statements でプログラムをデザインする」で特に印象に残ったこと

- ・ 言語学習は学習者のためにある。
- ・ 指導者側の役割は、言語習得を促進させること（水やり人→どんな花が咲くか楽しみ）。
- ・ 学習者の自立が目標。授業は共同プロジェクト。
- ・ 自分を変えていくのが教育。自分を変える勇気をもつ。
- ・ 今までコースとしての到達目標を考えたことがなかったので、学習者がどの程度話せるようになったかもよくわからなかった。
- ・ 目標を設定することで、より具体的に授業を組み立てることができると思った。
- ・ 学習者中心主義ということばのもつ意味。
- ・ CEFR の基本的意味の初歩的説明は助かった。
- ・ 多言語、複言語を端的に区別していただいたこと。
- ・ 到達目標が先にあり、そのためにはどうすればよいのか。
- ・ 今までと逆の発想をもたなければならない。
- ・ 教員の役割は、言語習得を促進させる学習方法のアドバイザーである。
- ・ 講師の話し方、内容が非常にはっきりして明確であった（ただし、話すスピードが速すぎて、（とくに後半）ついていけない部分もあった）。
- ・ 教師の役割は、学習者の学習を「助ける」のではなく、「促進する」ことという考え方。
- ・ 言語教育、学習は学習者のためであることは第一だが、指導者も自分が生涯にわたって言語を学ぶ学習者であるということ。
- ・ 日本語の支援者ではなく、学習者が言語教育により自立して学習できるように、促進者としての役割がある。
- ・ 教師の役割は支援者ではない。促進者である。
- ・ 教師は自立した学習者を育てること。
- ・ Can-do で実際に使えるようなことばのリストアップの時間を作られたこと。
- ・ Can-do 型授業は、広義の学習者中心主義。
- ・ タスクで運用能力をはかる。
- ・ 教員の役割は、学習者の手助け（サポート）をすること。
- ・ 到達目標は、学習者が自立して勉強するようになり、教師が不要になること。
- ・ 学習者と教師の協働プロジェクト。
- ・ CEFR、人は社会的人間である。理想的な言語ができるのではなく、自分のアイデンティ

ティを尊重する。

- 文型の意味導入→文型練習→場面を意識した口頭練習の順ではなく、逆である。先に到達目標がある。
- Can-do 型授業にとって何が大切なのかがわかったような気がする。しかし、実際に行うのは難しいと感じた。努力する。
- とても歯切れのよい授業で、たくさんの知識を教えてくださいと伝わってきた。先生の本を読んで、もう少し勉強したいと思う。
- 質問者の活動（読む、書く、インタラクティブ、プロダクション、聞く）が CEFR に繋がっていること。
- 「文型の意味の導入→文型練習→場面を意識した口頭練習」の流れは一代前であり、Can-do は逆で到達目標が先にくる。
- 教育は自分を変えていくもの。変える勇気が必要である。これがないと成長しない。
- 著作物に関して十分に留意されていたが、非常に大切なことだと思った。
- 言語教育の到達目標は、学習者が自立でき、講師が必要なくなること。大切な目標だと思う。
- CEFR とは、従来の理想的母語話者を目指すのではなく、コミュニケーションの部分的能力を認めていくための学習、教授、評価のための共通参照枠であることがわかった。
- CEFR を現場の授業で生かすには、Can-do チェックリストを学習者にも明示し、授業は共同作業として自覚させる。
- タクスをさせることで、文法は意味を伝えるために必要だと思わせ、タスクやテストなどが評価に直結すると、学習者にもやりがいを与えられる。
- 日ごろから、授業に使えるような場面を意識して生活することが必要だと思った。
- 言語教育の対象、役割、到達目標、目標到達の確認、原因についての確認。
- 言語学習は生涯にわたる学習である。
- タスクの中ではどんどん間違えてもよい → 今、どのレベルにいるかについて参考になる。
- 会話につまづいた際のコミュニケーションの修復（間違えたら言いなおしても OK）。
- 今日の講義で、自分でコースデザインを作るのがとても難しかった。
- 教科書を教えるのではなく、教科書で教えるということ。
- 学習は誰のため？役割は？到達目標は？達成度のチェックは？すべて改めて考えさせられた。こんな根本的なことを無視して教えていたことを反省した。
- CEFR の説明は専門用語が多く、進みが早く難しかった。
- Can-do のデザインも難しい。
- 教師の役割の説明。
- CEFR の考え方に基づいたプログラムの作成の仕方。
- 最初の Q1～Q5 によって、自分の目とは違う先を見据えた目をもっている人がいることを

発見した。

- ・教える側の役割についての先生の考えを聞き、自分のことを省みて、明日からの心構えにしたいと思う。
- ・学習者同志、学習者を教える人すべてが補い合い、助け合ってコミュニケーションを成立させ、向上させるという点は、改めて心に響いた。
- ・Can-do は難しい。
- ・教科書を教えるのではなく、教科書で教える。
- ・コースデザインの目標（到達）をはっきりし、それに沿った授業、評価をできるように考える。
- ・「教育は変わるものだ。変えよう。」大いに賛成である。
- ・Q1～Q5 の作成は、読む、書く、話す、まとめを述べる、聞くの活動となったこと。
- ・学習者中心主義（この学習者がどういうふうになりたいかを知る）。
- ・CEFR を大学の英語学習でどのように取り入れたかの実例がおもしろかった。
- ・はじめに到達目標を作って、場面シラバスを考える。
- ・最初の Q1～Q5 の作成をしてみて、これからの自分の授業のやり方を考えてみるよい刺激になった。
- ・教える側の役割は、学習者の促進者になる。
- ・学習、環境を整える。
- ・導き手として一貫性のあるものにする。
- ・到達目標を先にたてることによって、言語の習得ができるようになる。
- ・学習者を主体とした場合、まず学習者のニーズ分析が必要。
- ・教える側の役割は言語学習を促進していく。教師は植木の水やり人。どんな花が咲くか楽しみにする。最終的目標は、私（教師）を必要としなくなること。
- ・理念、目標なくして方法なし。
- ・到達目標を明示することの重要性。
- ・大変テンポがよく、もう少し聞きたいと思った。
- ・文型に頼りすぎる授業をしていたと反省している。
- ・言語教育は一生継続くものだとすることを、改めて再認識した。
- ・言語習得の促進者になることに同感した。
- ・自己反省の内容だった。教える側が変わる勇気をもつことの重要性を実感した。
- ・自分が知識不足のため、授業のテンポについていけなかった。
- ・教育は変えるもの、自分を変える勇気をもつ。
- ・文法とは意味を正しい形式で伝えるルール。
- ・自立した学習者。
- ・多言語主義と複言語主義。
- ・教育とは、自分を変えるもの。生徒も教師も同様である。変える勇気のないものは、教

育を受ける資格などない。

- ・たくさんのことを教えていただいたが、ひとつひとつについて、もっと深く、じっくりと教えていただきたいと感じた。次回の講座が今からとても楽しみだ。
- ・言語は生涯学習するもの。
- ・それぞれの部分的能力も認める。
- ・自分のアイデンティティを表現できるだけの言語能力。
- ・「教科書の体系をリデザインし、実践せよ」（教科書にとらわれ、「悪の体系」を継承するな）。
- ・自分を変えるため、変わるために言語教育を行うのだ。
- ・「理念→目標→タスク→学びが形成されるからチェックもスムーズになる。自ずと決定される」←なるほど！と膝を打つ。
- ・茨城大学の事例は具体的でわかりやすかったが、現実のボランティア活動の現場で適用するのは至難のワザに感じた。
- ・目標が明確になっていなければ、何をするのかわからない。目標を決めることにより何ができるようになるか、自分でもわかるようになる。
- ・テストでは実際の運用能力は測れない。
- ・英語教育のプログラムは、日本語の指導でも全く同様に考えられること（大学での英語学習プログラムの例は、とくにおもしろいと思った）。
- ・ワークの時間が適当でよかった。しかし、各グループとも質問を深く限定しすぎている傾向があり、じっくりこない気がした。
- ・大学総合英語プログラムを受講したくなった。私の英語が飛躍的に伸びそうな気がする。
- ・最終目標は、「学習者が私を必要としなくなること！」である。
- ・自分を変えることが教育である。変える勇気をもつ。
- ・CEFR は、1：コミュニケーションアプローチ、2：ノーショナル・ファンクショナル・シラバス、3：ソーシャルエージェント、などが背景になっている。
- ・「自分を変える勇気のない人は言語を学習する資格がない」→ 教える側もそうである。耳が痛い。なかなか自分を変えられない。
- ・「授業計画の作成」は難しい。
- ・到達目標に達成しているかどうかの確認。現実には教室内でよく把握されていない（目標に達していなくてもそのままにしていることが多い）。

第11回「自律的学習のあり方——Back to Back／モチベーションの支援」で特に印象に残ったこと

- ・今回の演習は、今までで最も楽しいアクティビティだった。
- ・「自分の思い込み」は、あくまでも自分の思い込みでしかなく、そこから丁寧に説明する

ことの大切さと、納得できるまで聞くことの大切さが体感できた。そして聞く、話す、読む、書く、最後に集大成される授業は参加していても楽しかったし、「お見事！」と脱帽ものだった。

- ・聞き手と話し手の両方を体験することによって、伝え方の難しさがよくわかった。
- ・自律的学習は、学習者に望む前に自分自身に取り組むべき課題だと気づかされた。
- ・学習者の自律的学習を促進するには、まず自分自身が自律的学習者になること。
- ・学習者を支援するには相手をよく観察すること。そして、その人に合った学習スタイルを見つけること。
- ・共通認識をもつことの難しさ。
- ・適切なことばを尽くして伝えようとすれば、伝わることは多いという実感が得られた。
- ・「常識」と思っていることが、「皆の常識」ではないということ。
- ・言語は、常にトレーニングしなければならない。
- ・自律的学習とは、自主管理、自主モニタリング、自主評価する学習である。
- ・言語コミュニケーションの実践をして、いかに思い込みで話していたか、より具体的に相手の文化風土の違いを考えてコミュニケーションをとらなければいけないかということを実感した。
- ・自分の四技能をモニタリング＝評価する重要性。(人を支援していく場合、相手のことばかり考えていてもだめである。教師も自分をモニタリングすべき)。
- ・自分が自分の学習を促進できる者になっているか。
- ・小さな成功体験の積み重ねが自信につながる。
- ・学習者を自律的学習者にさせていくには、私たちが自分にはどんな能力が備わっているのか、不足しているのかを振り返って考えることから始まる。自分自身、学習者も生涯言語学習者という考えで精進していくこと。
- ・自律的学習とは、勉強する上で何が必要か、どこまでやったら理解できているかという学びの中心となるものである。
- ・伝達力、方法を絵で描く演習で、コミュニケーションの難しさを教えてもらったこと。
- ・コメントを書く際、いかに相手の立場に立ってわかりやすい表現にしてやるかが大切。
- ・小さいステップから支援を進めよ。
- ・Back to backの実習は面白く、コミュニケーションの難しさが実感できた。
- ・自律学習とは、①「学び」の中心、②セルフモニタリング、③セルフアセスメント。
- ・「教える」自分の技能はどうなっているのか、学習を通じて振り返り自分を向上(促進)させること。
- ・聞き手と話し手役になって絵を描く作業では、素材の選択とペアを組む両者の言語運用能力レベルも、作業を成功させる要因となることがよく分かった。
- ・日本語ボランティアというものは、単なる語学教師ではなく、外国人の生活支援という点にも留意しなくてはならない。

- ・自分が自分の学習を促進できるようになることが大切。
- ・学習者に多くを体験させ、小さな成功体験の積み重ねがやる気を促進させることになる。
そのためには、指導者側の観察が大切となる。
- ・この授業を受けて、自分の日本語の理解力の低さに気づいて驚いた。
- ・自分はいかに思い込みが激しいか、その思い込みによって判断しているかに気づかされた。
- ・コミュニケーションがうまくいかなかった時、往々にして相手の受け取り方が悪いと、相手のせいにしてしまいがちだが、自分の伝え方の悪さを反省すべきであったことに気づき、今後注意したいと思った。
- ・日本語能力において、読む・聞く・話す（産出、やり取り・書く）のどれ一つとってもそれぞれに大事であることと、話すことの難しさを改めて感じた。
- ・コミュニケーションは、話し手と聞き手ともに 50% の責任がある。
- ・自律的学習は学習者だけのものではなく、我々指導者の自己分析一つとっても大切であることを痛感した。
- ・自分の弱点（話す力）をなくすよう努力したい。
- ・自律学習の意義と育て方について。
- ・コミュニケーションのとり方について。
- ・自律的学習のあり方について。リフレクションの大切さ。
- ・日本語ボランティアとして、自分の日本語技能がどうなっているか、反省させられる。
- ・話すこと、相手に正確に伝えるということは、とても難しいと思った。今日の講義で演習をやってみて実感した。
- ・聞き手としては、質問・確認が必要だと痛感した。
- ・自分の能力不足を痛感した。
- ・Back to back は初めての経験で、見えないものを正確に伝えたり、聞き取ったりする難しさを改めて学んだ気がした。
- ・いろいろな経験をさせていただき、自分の四技能の足りない部分を見せつけられた気がする。また、ボランティアとしての責任の重さを実感させられた。
- ・Back to back で隣の人にコメントをもらったこと。
- ・言語学習は、生涯にわたって自律的に続けていくものである。トレーニングが必要である。
- ・「自律的」と「自発的」がどう違うのかということから、「自律的学習」は「自発的」を含むものであること。
- ・ボランティアは学習者をよく見て、その人の学習の促進を手伝うこと。
- ・自律的学習の重要性を改めて認識した。
- ・自律的とは自立的と考え、学びの中心に据え、自らマネジメントすることから始まることだといえる。

- ・ 教え手としての能力を客観的に知ること大切なことである。
- ・ 私にとって自律的学習とは何かを考えてみる。
- ・ 息つく暇もなく、スピーディーな講義についていくのは結構大変だったが、いろいろ気づかされる点が多かった。
- ・ 単一民族の日本人は話さなくてもツーカーとか、阿吽の呼吸とか言われているが、今回のように自分の描いたものを説明したり、相手の描いたものを説明で聞きながら描こうとしたりしても、オリジナルのものとはかなりかけ離れてしまい、コミュニケーションの難しさを痛感した。
- ・ 日本人同士でも意志疎通は難しいのだから、外国人とはもっと難しいのだということをも改めて感じさせられた。
- ・ ペアワークで的確に説明するというスキル。難しいが習得したい。
- ・ ボランティアであっても、教える側の責任は重大である。
- ・ 教えるとは、学習を促進することである。
- ・ 学習者が、ことばが全く分からないところで自分らしく生きていくためには、言語習得が必至である。よって、日本語ボランティアの責任は重大である。
- ・ 課題があって文を読み、理解し、相手に伝え、文にする。普段全くやらないことをして、本当に勉強になった。
- ・ 具体的な課題の中で自律的学習者を育てるとは？ 自分の欠点（能力不足も含めて）を知り、学習していくことが、ひいては自律的学習者を育てることにつながるということをはっきりではないが、以前よりよく理解できた。
- ・ 自律的学習とは、自分が思っていたよりさらに自律的でなければならない。方法、過程だけでなく、目的設定から始まって評価まで、全てにわたることに自律の意味を知った。
- ・ 話し手としてはまず、相手にわかってもらえるかを最初にしっかり心に置くことが大切と再確認した。
- ・ 聞き手として相手を大切にしていると思ったのも、思いあがりであった。
- ・ ボランティアとして、学習者に学びの促進をしっかり（少しでも）していきたい。
- ・ 日本語能力は全て勉強中だと思っていたが、話すこと、書くことは苦手でも、それ以外はまあまあと考えていた自分を反省した。
- ・ 聞き手、話し手としての確認をもう一度する必要性を感じた。もう一度自分で努力し、勉強していきたい。
- ・ Can do の授業に向けて勉強していく。
- ・ 振り返りの重要性を再認識した。今後取り入れたい。
- ・ 学習したことを言語として残しておくことの大切さ。
- ・ 「自律学習ができる学習指導」ができるようになるよう努力したい。
- ・ タスクをやって一貫性を感じ、大いに参考になった。
- ・ 従来は文字だけ読んでいたので分かりにくかったが、今日は具体的で分かりやすかった。

- ・自分の日本語能力に疑問を感じていたので、よい振り返りの機会になった。
- ・学習を通して、学習者の得意な学習スタイルを見つけ、的確な教え方をする。
- ・自分が自分を促進できる人間じゃないと、学習者を支援することはできない。
- ・学習する本人の得意な学習スタイルを見つけて、授業を構成するとよい。
- ・言語習得は、その人の人生に関わっている。ボランティアはその取り掛かりを担っている。
- ・Back to back、自分をモニタリングすること。
- ・どんどん失敗してもよいと感じる環境づくり。
- ・小さな成功体験の積み重ねが大きな自信になっていく。
- ・自分の欠点、長所も突き詰めると、あまりにお粗末であることに気づかされた。
- ・自分が日頃描いている「ボランティアであること」が、あまりに小さな絵であったこと。
- ・ことばで表現する場合に、相手にいかに理解してもらうか、相手の話していることをどのように正確に理解するか、この難しさを学んだ。
- ・話し手のイメージと聞き手のイメージとでは、正確なことばの媒介がないと、異なったものになる（正しく教えているという思いこみを振り返る必要がある）。
- ・コミュニケーションを図るということは、思っていたよりずっと難しいことだと実感した。
- ・学習することで個々の学習スタイルを知る。
- ・Back to back を通して気づいた弱点は、自身の性格や外国語学習の問題点と共通していた。
- ・「アサンプション」など、大切な術語を日本語で説明していただき、重要性を理解することができた。
- ・今回の活動を通じて表現の難しさ、アサンプションの概念が理解できた。
- ・学習者が日本で生活することで、言語習得が大きく関わってくる。そのために、その人の必要としていることを促進していくことが、日本語ボランティアの役割である。
- ・小さな成功体験をたくさん経験させる。果たして、自分はそのような授業ができていだろうか？
- ・とても楽しいアクティビティだった。自分の弱点（思い込みが激し点）がよくわかった。これからの活動に反映させていきたい。

第12回「これからの地域日本語教室のあり方と可能性」で特に印象に残ったこと

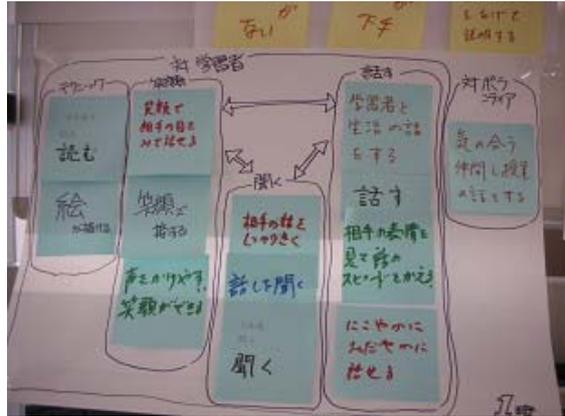
- ・Can-do 型授業の真の意義……単に言えるだけで止まっているはダメで、めざすのは言ったことによって相手の状態を変えさせること、目的を完遂できること。
- ・『みんなの日本語』の文型・例文を使う際、学習者がそう使わざるを得ない状況をしっかり考える。

- ・構文型教科書を Can-do 型授業の方向へ合わせられるような授業をしていく。
- ・問題に対する共通認識がなければできない。
- ・「ポートフォリオ」の活用が今後の課題である。
- ・教養のために日本語を教えているのではない。何かをするために必要な日本語を教えている。
- ・Can-do 型の授業をする目的は、学習者の生活に役立つものを教える、ということ。同時に、文法などの知識を教えることをおろそかにしてはいけない。
- ・文化的背景を考慮に入れる必要がある。
- ・「これまでの講座を振り返って」の演習と、その後のまとめを通して、結局 Can-do を理解できていないことがわかった。12回、何を聞いていたのか。
- ・Can-do 型授業で何ができるようになるか。何か具体的な課題があれば、それを解決できるようにできるか。
- ・日本語を教えることに自己満足していないかを自問。
- ・自分たちの団体の現状を踏まえて、どんな問題が生じているかという共通認識をもたないと、改良はできない。
- ・C文化より c文化の大切さ → その文化圏で生活するにはとても大事。
- ・ポートフォリオと評価について。
- ・今回の講座を受講して、Can-do 型授業というものがようやく理解できたような気がする。これを今後のボランティア活動において、どのように実践していくかが問題であり、易しくはないと思うが、自分なりに努力していきたいと思う。
- ・自分がおかれている場所で（教室で）、自分たちの現状をみんなで考え、どのような問題が生じているのかを認識し、共有すること。
- ・Can-do 型とは、押しつけようとするものではない。日本語で何ができるか。メソッドではない。
- ・文化の解釈については、これからも考えていかなければならない。
- ・自分が短時間で教えて、生徒が直ちにうまくなっているという錯覚をもつな。
- ・日本語教室の現状をなぜ反省しなければならないかという共通認識をもて。
- ・Can-do は「言うことができる」ではなく、「相手に影響を与えることができる」という意味だった点。
- ・初心者にも機能達成のため難しいと思える言い方を、決まり文句として教えてしまう点。
- ・独りよがりの、自己満足のボランティアにならないこと。
- ・所属する日本語教室の改良すべき点を共通認識し、取り組んで話し合いをすること。
- ・Focus on Form(F on F) の概念の特色。
- ・週 2 時間の日本語授業も意味がある（学習の方向付けを促す）。
- ・ボランティアはプロではないが、手抜き、一人よがりではダメである。
- ・Can-do に決まった授業形式はない。

- ・ F on F、学習につまずいた時、振り返るための応用力がつく。
- ・ 指導の際、危険なことは「手抜き」「独りよがり」、一生懸命すぎてもいけない。
- ・ 外国人に日本語を教える意義をもう一度考え直す必要があり、「日本語を教える」ことは 2 番目の目的であり、1 番目の目的は「外国人が円滑に日本で生活できるようになってもらう」ことである。このことが、指導にあたって見失いがちになりやすいと再認識できてよかった。
- ・ 自分たちの能力を評価することは難しい。自分が言われた時の受け止め方はともかく、相手の評価をどう伝えるか、どうしたら受け入れてもらえるのか課題になる。
- ・ 先生が言われた「文化のトライアングル」のことが、とても気になった。
- ・ 他の人の意見が多く聞けたのは、よかった。
- ・ Can-do の目的：「日本語を話す目的をはっきりさせること」。
- ・ グループワーク内での発表を通して、自分自身のグループの特徴や問題点を客観的に見ることができた。
- ・ 学習者のニーズ調査、自分の指導法のチェックと、学習者の到達度チェックをすることの必要性を学んだ。
- ・ 新しい指導法などを学ぶ前に、自分の所属グループの問題点などを把握すべく、共通理解していくことが大切だと学んだ。
- ・ いろいろな先生の講義を受け、少しは Can-do が理解できたと感じたが、まだ消化不良状態だ。地域へ戻って仲間に伝え、学習者の必要としている日本語をどのようにして促進し、支援していくか、私たちももう一度勉強し直し、話し合い、一歩でも前進したいと考えている。
- ・ ボランティア学習者の評価方法、基準の考え方。
- ・ Can-do 型授業は、学んだ日本語を使って何かができるということであり、教える方法ではない。
- ・ 文化をどう扱うか、が今後の課題か？
- ・ 「ポートフォリオ」の内容を改めて学びたいと思う。
- ・ 評価システム、とくに「ポートフォリオ」のこと。
- ・ 参加者会議（グループ別・8名）で、いろいろな意見が出ておもしろかった。
- ・ ボランティアの悩みは、所属団体が異なっても、かなり似通っていると思った。
- ・ ボランティア同士が評価し合うことと、壁を作らず学び合うことはなかなか難しい。
- ・ 評価ということが、自分のこれからの課題である。
- ・ ボランティアとして「手抜き、工夫なし」はよくない。最近の私の状態を反省した。
- ・ 先生の講義はいつもかみ砕いて教えていただき、分かり易く、もう一歩前進しようという意欲につながる。次を期待している。
- ・ 日本語を教えることにばかり気を取られずに、その日本語で外国人が生活できるような支援を心がけたいと思う。

- ・ Can-do は語学教育の原点に戻ったものだと感じました。
- ・ 先月、アメリカのホテルで宿泊先のアンケートとして、「スタッフの Can-do Attitude」の評価があった。Can-do の講座を受講している時に、とても印象的なことだった。
- ・ Can-do の内容、概要が少しずつわかってきた。
- ・ ポートフォリオは実践してみたい。
- ・ ボランティアのあるべき姿が確認できた。
- ・ ポートフォリオは学習者自身の記録であり、学習意欲となる。
- ・ 日本語を教えるのではなく、日本語で Can-do できるようにする。
- ・ 外国人が助かることを常に考える。
- ・ F on F。文法も大切であること。
- ・ Can-do 型とは、日本語を教える際、教養としての日本語を教えるのではなく、日本語を使って何ができるか、外国人が円滑、安全な生活をするための支援として、日本語を教えるのがボランティアである。
- ・ やり方はどうであっても、目的は日本語で何ができるということを意識した教え方が、Can-do である。
- ・ ボランティアの日本語教育は、生活者としての会話をできるようにすること。
- ・ なぜ学びに来るのか、なぜ教えているのかを考えれば、問題点が正しく見えてくる。
- ・ 日本語で外国人が助からなくてはいけない。
- ・ Can-do 型授業とは、メソッドではなく、日本語で何ができるかを意識して生活に役立つように教えること。
- ・ ボランティア教室が抱える問題を、どう共有化するかが大きな問題である（現状では話し合う機会もない）。
- ・ 学習者の学習の動機付けが必要。
- ・ 週 2 時間の日本語教室の役割は、方向付け、自立学習の促し。
- ・ 楽しい授業を受けられた。今後も常に勉強していきたいと思う。
- ・ 世界的に語学教育が見直されているタイミングにいられることがうれしい。
- ・ 学習者、教師ともに評価システムの導入を改めて実感した。新年の目標として始めたい。
- ・ 問題を正しく見つけてみんなで共有し、解決していく努力をしていく。こちらも新年の目標。
- ・ C 文化と c 文化の違い。
- ・ ボランティアも、人間関係が大切である。
- ・ 日本語教室の再構築の必要性を強く感じた。
- ・ 背景にある文化の理解の重要性を感じた。
- ・ Can-do 型授業の目的＝日本語を活用して何ができるようにすること。外国人が文化的で円滑な生活ができるようになること。日本語ができなくて困っている外国人を、日本語を通じてどのように支援していくかが重要。単なる架空のリハーサル型はダメである。

- ・自己流、場当たりの授業、一貫性のないものは弱い。
- ・自分が教えたから学習者が話せるようになったという錯覚が、一番怖い。
- ・ワークショップで他の方の意見を聞くと、講座開始時と意識が変化してきていると感じた。
- ・日本語教室での現状や、問題意識を共有することができた。
- ・他市の教室の問題点を聞いて興味深かった。
- ・受講者の意識がそれぞれ高まっていると感じた。
- ・日本語を教える目的は、学習者が日本語を理解できることだけでなく、その日本語を使って何かができるようにさせてあげること。
- ・構文型教科書を使って、コミュニケーションアプローチを実践している地域もあるようだ。
- ・ボランティアは思い込みによって授業を展開しがちなことも多い。自分自身について客観的に認識し、欠点についても認めていくことが大切である。
- ・地域によりかなり差が大きく、全体としてレベルが上がっていくことはなかなか大変だと、グループの話し合いで感じた。
- ・Can-do 型授業活動を実現するために、ボランティアの意識改革が必要である。
- ・架空のリハーサル型学習のみではダメ。間違った時はF on Fに戻る。
- ・c文化(スモールc文化)の認識が先にあるべきである。
- ・現状の問題の認識を正しく把握する。
- ・日本語を教えることは、第二の目的である。第一の目的は、日本語を通じて支援できることである。
- ・「日本語を教える」とは言っても、ボランティア日本語教室は、なぜ外国人に「ボランティア」として日本語を教えているのか、ということを実感しなければならないことに気づかされた。今まで、単に日本語のいろいろな知識を教えていけばボランティアだと思っていたが、生活の支援になる日本語指導でなければ、何にもならない。
- ・問題意識、日本語教育についての振り返りはよかったと思う。グループ内だけでも共有することができた。
- ・みんな口を揃えて、「Can-do 型」「生活に必要な日本語」と言う。「具体的には」と聞いても、「Can-do」としか答えられないのも共通しているようである。



授業(講義・演習)のようす

② 実施主体からの研修内容結果評価

前掲のアンケート結果、「講座全体の印象」の項目は、大半が「大変満足・満足」と答えており、全体として好評を得た講座になったように思われる。

「講座内容」に関しては、「大変分かりやすかった」がわずかで、大部分が「わかりやすかった」と答えているのは、やはり講座内容のテーマ自体がほとんどの受講者にとって未知の領域であったためと思われる。他の項目の回答結果からも、本講座が好意的かつ満足度の高いものとして受けとめられているように思われる。

今回は、日本語ボランティア教室の指導が単に生活行動から切り離された抽象的文法

規則・知識の指導に終始せず、何よりも地域日本語教室の役割とも言える「生活行動のための日本語力＝Can-do」ということにと起点を置いた講座を企画した。

今回も、この講座が契機となって、研修事業を終えた後、参加者の所属する日本語教育関係各団体に自主的な研修会、勉強会が設けられたところが多い。今後も、このような研修事業に参加したい、との声が多く寄せられたことは、地域の日本語ボランティア活動の意欲、向上心が高いことを示すものであると考えられるが、逆に言えば、それだけ現時点でのボランティア活動には、改善・補充していくべき問題が多岐に渡って存在しているということになる。

今回の講座でも、前回の講座に引き続き、文化庁から提示された『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案』を一つのテキストとして用い、Can-do-statements という視点からの語学教育について多くの問題を投げかけてみたが、多くの演習を通じて、受講者は頭ではわかっている、それを実践することの難しさをあらためて感じた部分もあったようである。

講座で実施したグループワークやワークショップは、“知識の暗記・理解”を求めただけの説明型指導法の上に埋没せず、日本語ボランティア本来の「日本語の力を育成することを通じて、地域在住の外国人を助ける」という精神を見失わず、どのような日本語指導・日本語力が生活の助力になるのか、という点をもう一度、再考していただく機会にもなれたなら幸甚である。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

今回、この講座のテーマとした「地域」という概念についてだが、これはともすれば“その地域の特殊性、固有性”のみを追求するような受けとめ方をされるきらいがある。「地域共生」の考え方とはそのような狭義のものではなく、まずは外国人が“近隣の社会と基本的なコミュニケーションを図れる”という前提にあるのだということに注意しないと、「地域共生」が単なるローカル慣習教育に墮する虞がある。「地域共生のための日本語教育」とは、外国人の現実の生活とそこでの行動に焦点を合わせた日本語教育であり、その指導のためにはコミュニケーション能力という観点からの語学教育の在り方が、今後ますます研究されていかねばならないと強く感じさせる講座であったように思う。

現在、松戸市、我孫子市、柏市をはじめ、東葛地域の多くの市では、外国人在住者が増大する傾向にあり、各市の設置する国際交流協会のボランティア日本語教室などへの参加者もかなりの数にのぼる。しかし、一部の教室では、参加する外国人の数がかなり減少する傾向も見られ、これは日本経済の混迷や就職環境の悪化などが原因と考えられているが、語学教育の立場からすると、「役に立たない日本語を教える教室」という評価が広まってははいないのか、という危惧がある。それはやはり地域日本語教室などでおこなわれている多くの日本語指導法が、従来の構文中心の文法重視型知識教育から抜け出せず、外国人が要望する実践的で日常生活を支える日本語指導となっていない

傾向にあり、それはこうした日本語教育にあたっている指導者の語学教育能力に限界があるためでもある。日本語教員養成講座などで研鑽経験があるケースも少なく、また日本語学校にあつては近年ますます進学のための受験型日本語学習になっているところが増大している現実があり、プロの日本語教師経験者であっても、コミュニケーション能力を重んじた実践的語学教育の指導が十分認識されていないことも事実である。

日本語教育を単なる一般的言語習得の枠内で考えるのではなく、日本語会話を通じて、外国人が日本の地域社会とどうかかわっていけるのか、そのためには従来の指導をどのように転換し、また何を上乘せしていくべきか、といった研修をこれからも継続していきたい。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

今回の研修講座には、以下の団体に属する指導員からの応募があった。

柏市国際交流協会
柏市中央公民館日本語教室
柏市学校派遣日本語支援の会
鎌ヶ谷市国際交流協会
鎌ヶ谷市日本語クラブ
センシティー土曜にほんご学級
千葉市国際交流協会
習志野市国際交流協会
野田市国際交流協会
船橋市東部日本語教室
船橋市中央公民館日本語教室
船橋市国際交流協会日本語教室
松戸市国際交流協会日本語ボランティア会
八千代市国際交流協会日本語ボランティア部会
取手市国際交流協会

主として松戸市、我孫子市、鎌ヶ谷市の国際交流協会、柏市公民館等で実施している日本語教育研修会において、本講座の概要報告会を実施した。また、意見交換会を定期的(年3~4回)に開く計画が立てられ、すでに各団体にて一部実施されている。

さらに、この講座をきっかけに、各市の国際交流協会会員相互の連絡も活発化しているようである(一例は、研修会の他への呼びかけ、地域連絡網の整備など)。

聖徳大学言語文化研究所 B プロジェクトでは、JSL(Japanese as a Second Language=

第二言語としての日本語)日本語教育研究を、平成18年度から設置した報告者会議、研究班会議(主として松戸市教育委員会学校派遣員からなる特別研究員の研究組織)を中心に進めてきた。今回の研修講座開講を機会に、上記の諸機関・団体ともより積極的な連絡を取り合い、今後も地域の実情に有益な共同研究を進めていく計画である。

② 研修後の人材活用

今回の受講者の中から、来年度の聖徳大学言語文化研究所Bプロジェクト研究に参画してもらう人員を選定する計画である。

また、今回の研修講座を修了した受講者に履修証書を配付し、今後の個々人の活動が支援されるよう、各関係機関に呼びかけていきたい。

(12) 今後の課題

やはり、「実習の拡大」と「具体的実践例の提示」を望む声が多かったことを受け、今後の講座では前述したように、模擬授業や思考実験などを盛り込んだ演習に多くの時間を費やし、外国人が地域社会に日本語というコミュニケーション手段によって、適応・参加できるようになるための Can-do 型日本語指導法をテーマとしていきたい。

ボランティア活動の中には、社会性が大きいものもあれば、個人的な領域で成就するものもある。介護・救命・カウンセリング・犯罪防止など、人命や人生にも関わる奉仕活動になれば、それがいかにボランティア活動であっても、素人が安易に手を出す活動でないのは言うまでもない。また、「ボランティア＝素人」という図式も誤った認識である。先のような高度な専門性が不可欠なボランティア活動も多数存在するのであり、それらは相当の専門的訓練を経た者でなければ賄いきれない責務を負うことになる。実は日本語ボランティアも人命や人生にも関わる奉仕活動だと言ったら大袈裟に聞こえるかもしれないが、ある意味では日本で生活をする外国人の人生、ひいては人命に関わる責任ある活動だとも言える。避難誘導の日本語が分からないが故に、震災で命を落とした外国人、教室で教えられた適切ではない日本語を使用したために職場で立場を悪くした外国人、誤解される日本語とは知らずに平気で使用して人間関係を壊した外国人、日本語で意思疎通ができないストレスから犯罪に走った外国人……思えば、コトバというのは便利だが、一方で使い方に無知であれば、悲惨な結果をも招いてしまう道具であることは、どんな言語の運用においても共通している。

自らの指導力のレベルアップに熱心な日本語指導者は、当然ながら現状の自分の指導力に未だ不十分さを感じており、また、少しでも良いヒントを得られないかと研修に勤んでいる。そこには、「自分のできるレベルでよしとする」という安易な態度はなく、せっかく志したのだから、自分が可能な限り活動を本物にしていきたい、という熱意と気迫が感じられ、質問などで講座の予定の時間が超過することもしばしばである。しかし、その情熱の大きさと指導実力とは必ずしも比例しない。この場合、むろん教師は自らの向上を

期待して研鑽するわけだが、単なる実力不足というレベルではなく、日本語ボランティアの目的・意識についての大きな誤解や認識不足といった事情がその指導法の向上・改善を妨げているという場合も多い。いわゆる「大きなカンちがい」をしているわけで、こうした教師にはそれをはっきり認識させただけで、実践的な日本語指導法に気付き、飛躍的に指導力が向上したということも珍しくはない。つまり、ここでも自らを正しく「評価」してくれる人がいなかったために、自らの「カンちがい」あるいは「留意点」に気付かなかったことが原因で、やはり能力・技能を指導する活動というレベルにあっては、その指導法に対する適切な「評価」が大きな鍵になることを痛感する。

聖徳大学言語文化研究所では、今後もこうした声に応じて、さらなる有効な取り組みを企画し、地域日本語教育のいっそうの充実と発展に努力していきたいと考えている。